

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和六年十月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十三卷 第七号（通卷二七二号）

万象

B A N S Y O

十月号

2024.10



十月の句

藍染を晒す水音みづねや秋日和

岩崎眉乃

藍麩よりずつしりと重い糸を取り出し、乾くまでの作業の工程である。晒す時のさまざまな水の音、匂いや色の変化、干し終えた後の安堵感。気付けば爽やかな秋日和である。

日本人の誰にも似合う藍染。虫よけ、消炎鎮痛としての効能があるとされている。野良着として、特に田植時には、藍緋の着物、モンペ、手甲、脚絆など華やかな風景も今は昔となってしまった。

岩崎眉乃先生のバイオリニストとしての聴覚を感じる句である。

*平成二十年十月本郷分会にて

(草間三香子)

令和六年

十月号

万象

BANSYO

手をのべてあなたとあなたに触れたきに
息が足りないこの世の息が

河野裕子（歌集『蟬声』所収）

万 象

令和6年10月号

名誉主宰作品 青 蘆 内海 良太 4

主宰作品 小檜の風 江見 悦子 5

風音集Ⅰ・Ⅱ

小林 愛子 6
中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・曾根 満
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

風音散歩⑳ (十月号) 小林 愛子 10

万象の窓㉑ 森林太郎と脚気 江見 悦子 11

同人作品

江見悦子選 12

同人会だより

「万象」オンライン同人句会の参加者募集 32
8月の「万象」オンライン同人句会高点句

珈琲ぶれいく㉓ 江見 悦子 33

同人作品の佳句 岡本 敬子 34

同人特別作品

葛ざくら 丸本 祥夫 36
蟬 時 雨 下嶽 孝一 37

特別作品評 (八月号) 38

第二十二回 万象俳句賞発表 39

万象俳句賞 受賞作品 空の不思議 伊藤 文恵 40

次 点 茶 摘 伊藤 文恵 42

青 蘆

内海良太

(名替主幸)

声 太 き 茂 吉 の 里 の 油 蟬
夏 見 舞 熊 に 注 意 の 言 葉 添 へ
鉄 橋 は 徐 行 花 火 を 見 る 速 度
水 替 へ て 金 魚 の 紅 を 放 ち け り
た て が み の 切 揃 へ あ る 祭 馬
馬 を 引 く 馬 丁 は 少 女 桐 の 花
青 蘆 の 切 つ 先 蜘蛛 の 糸 卷 け り

小檜の風

江見悦子

(主宰)

夏富士へ新しき窓押し開く
目のずれしピカソの女昼寢覚
遠雷や蒼富士を雲離れんと
トスカ観に1パイントの黒麦酒
菩提樹の茂りに言葉育ちたる
来迎図掛け紅殻の夏座敷
夕づくや小檜の風の秋めける

中山純子先生十回忌 二句

夜の秋

小林 愛子

(名譽顧問)

臨月の身体がよぎりアマリリス
蜘蛛の囿に目玉の二つ吹かれをり
死を知りてより花さびた揺れゐるは
追憶の旅寝に及び明易し
バンダナを締め炎帝の魔の時へ
草に這ひ草をこぼれてみどり蜘蛛
遠くより睡魔の来り夜の秋

月涼し

中村千久

(編集人)

虫の声

柳澤宗正

(顧問)

イスラエル招んで広島原爆忌
手花火の後ろの闇の深かりき
フランスパン選ぶグッチのサングラス
どろどろと下座の太鼓や夏芝居
駒を打つ美しき指さき夜の秋
月涼しアルハンブラ宮殿離宮の壁のアラベスク

蜆売り

福島せいぎ

(顧問)

むかご飯

曾根満

(同人会会長)

金の穂をかかげ夜明けの花蘇鉄
夕立の去りてにはかに風起くる
蜆売り吉野川より来しといふ
鶏頭の一本立ちや無頼墓
あをぞらへ飛び出し金魚死んでをり
すててここで歩く楽しさ晩年も

朝寒や決め兼ねてゐる外出着
古書街の庇に送る秋時雨
方言の媪の手よりむかご飯
霜降や風の止みたる捨て畑
黄落や谷の奥なる猿を聞く
行く秋や雨に打たるる阿弥陀仏

墓 洗 ぶ

松原智津子

(北海道)

食ひしん坊海鞘の刺身で蕁麻疹
脚甲羅雁字搦めの茹で毛蟹
野葡萄を垂し老松時めけり
立秋を忘るる五輪ムードかな
墓洗ふ亡夫に語りかけながら

天 井 画

亀田やす子

(栃木)

朝日差す稲の葉先のするどくて
豆飯や防空壕の話など
拾ひたる天蚕に彩残りをり
堂涼し百人一首の天井画
雷激し繕ひ物の手を止めて

涼しき音

沢辺たけし

(千葉)

軒端より涼しき音の来りけり
銀色の雨に翹たて川蜻蛉
門灯の点らぬ家の凌霄花
河馬潜り渦巻く水に夏落葉
猿山の猿点点と片蔭に

今朝の秋

吉中愛子

(東京)

蓮の葉の花と蕾の浄土かな
蓮閉づる風の鎮る未刻
大山を浮足立ちの雲の峰
せかせかと原爆の日の八時過ぎ
眩きを白紙に記す今朝の秋

夜の秋 榎本文代

(神奈川)

老鶯や堂に登山の曼陀羅図
登山口もぐらの土も踏みしめて
からびたる蚯蚓を蟻の曳いてをり
コルク栓抜く音ひとつ夜の秋
上げ潮の川あをあをと広島忌

心 太 神田美穂子

(静岡)

枝道の甘味処や水旗
皺くちやのハンカチーフや師を偲ぶ
小麦色の美しき鎖骨やサンングラス
雑踏を抜け不忍池の蓮の花
エメラルド婚間近の夫と心太

鵜の橋 井村和子

(石川)

白山を仰ぎ茅の輪をくぐりたり
珈琲の二杯目欲りし星逢ふ夜
昭和の世遠くなりたり月へ旅
鵜の橋渡りしと夢にこゑ
師と同じ千支のうさぎや月涼し

気 配 前田貴美子

(沖縄)

万緑の風見ゆ朝のミルク壘
夏蝶の気配物干し竿に風
黙禱の刻よ扉を万緑へ
落蟬やいつもの道のいつもの木
残されて灼けてきざはし果てなくあり

風音散歩 ㊶ (十月号) 小林愛子

大山を浮足立ちの雲の峰 吉中愛子

掲句の大山は丹沢山地の南東、厚木・伊勢原・秦野三市にまたがる。標高1246メートル、丹沢山地の雄峰であることを称えた山名ともいい、古来農業神や海神として尊敬され修験者の道場ともなった。雨降山の異称もあり、山頂に阿夫利神社、山腹に大山寺があり、大山詣の講が賑わいを見せた。雲の峰は、聳え立つ入道雲の威容を山並にたとえていう。

掲句は、その雲が「浮足立ち」という擬人法であるが、そもそも入道雲が見立てなので、イメージしやすく、おおらかなおかしみがある。雨乞いの山は天候が傾くのであろうか。

コルク栓抜く音ひとつ夜の秋 榎本文代

「夜の秋」は晩夏、昼はまだ暑いが夜は涼味を増し秋のように感じることをいう夏の季語である。初出と思われる作例は大正2年原石鼎の〈粥す、る袖が胃の腑や夜の秋〉で、これを夏と決めたのは「ホトトギス」雑詠選者の虚子という。

掲句はコルクの栓を抜いた音を提示しただけであるが、夜の秋の季語をいれると一気に部屋の佇まい、くつろいだ様子などが目に浮かぶ。主観的な季語は詩人の诗情に支えられ、近代に立てられた季語の中で俳人の愛着も深いといわれる。

軒端より涼しき音の来りけり 沢辺たけし

夏の暑さにはひとしお涼気が意識される。涼しさを最も欲するものが夏だから「涼し」は夏の季語となる。吹き過ぎる風や流れる水に、木陰や驟雨に、また扇の風や風鈴の音のわずかの涼気にも嬉しくなるのである。

句は「軒端より」とあり、さしずめ風鈴の音が考えられるが、解釈は自由である。俳句は述べるものでなく映像を結ぶ物であれば、掲句は俳句なればこそその表現と言える。

白山を仰ぎ茅の輪をくぐりたり 井村和子

白山は県南東、石川郡尾口・白峰の二村と、岐阜県・福井県にまたがる火山帯。富士山・立山と共に日本三霊山の一つ。豪雪地で残雪の多いのが山名の由来だが今や気象は変わった。古くから信仰の対象として白山自体が御神体として仰がれてきた。(白山にきて水無月の祓ひ待つ 前田時余)

掲句は茅の輪をくぐる前にまず「白山を仰ぎ」見たというのが眼目で、土着の人の敬虔な祈りの姿を見るのである。

豆飯や防空壕の話など 亀田やす子

豆飯は剥いた豌豆(グリーンピース)を炊き込んだご飯。鮮やかな緑の豆、艶艶のご飯を囲んだ夕餉は庶民のささやかな仕合せで話も弾む。老人は決まって戦時下の苦しかった日目に触れる。戦争を語り継ぐのは大切だが、幼子は御替りの茶碗を差し出し、卓上にグリーンピースがこぼれている。

森林太郎と脚気

江見悦子

明治17年、22歳の陸軍軍医としてドイツに留学した森林太郎の研究課題は、衛生学だった。彼のドイツ語能力はまず抜けており、現地ではドイツ語の論文を発表し学会の討議にも参加する等、上司・石黒忠愍の期待に十分に応えるものだった。

4年後に帰国してすぐ、林太郎は帰朝演説を行い、ドイツの最新の栄養学説をもとに「日本食のたんぱく質は不足していない、日本食はなんら西洋食に劣るものではない」と意見を述べた。ねらいは、高木兼寛の兵食改革の根拠「日本食はたんぱく質が不足している、それが脚気の原因である」を打倒することにあった。演説の中で彼は、高木兼寛を「英吉利流の偏屈学者」と呼び、露骨な非難を浴びせた。学問的な理論に乏しい兼寛の説の弱点を突いた感情的な講演に、海軍は憤激し、脚気を巡って陸軍と海軍の溝が一層深まる事態へと発展した。

石黒は明治11年に出した「脚気論」の中で脚気は伝染病であると明言し、終生その主張を変えなかった。林太郎はその石黒に同調し利用されすぎた、と山下政三氏は述べている。当時の日本の医学界は東京大学閥が力を持ち、理論重視のドイツ医学が主流であり、臨床重視のイギリス医学は隅に追いやられていた。陸軍対海軍、東大派對私学派という対立の図式が続いていた。

東京の文京区立森鷗外記念館では、平成27年に初めて「医学者としての森林太郎」の展覧会を開いた。詳細な資料集の中で、坂井健雄氏は帰朝演説について「若気の至り」と記しているが、果たしてそれで済ませられるものか疑問が消えない。軍医として出世の階段を上って行く過程で起きた二つの戦争の際、林太郎は脚気患者を激減させた海軍の改革に目を向けることが出来なかったのか。たとえ最高責任者ではなかったとしても真実を見極める科学者として、発言できなかつたのか。

高木兼寛に筆を戻したい。大正末期、脚気の原因はビタミンB欠乏にあると、国の調査会によって結論が下された。日本の医学界では認められなかった兼寛だが、欧米では脚気研究開発の第一人者であるとされている。その生涯については、吉村昭の小説「白い航跡」に史実が尽くされている。

同人作品



江見悦子選

○は佳句に選ばれました。

札幌 岡本敬子

街ちゆうをポプラの絮の飛べる夏
逢魔が時白ひんやりと山法師
さえざえと雨つぶ帯ぶる額の花
あぢさゐの庭を狐が音もなく
ひつじ草何か蠢く水の底

札幌 林陽子

水一本持ちちて酷暑の動物園
藻岩山昏れみどりの闇へロープウェー
のりだして子象見る子の玉の汗
かるがろと御輿に跳ぬる女の子
アスファルト匂ふ十字路荒神輿

札幌 落合裕子

絮毛積む庭六月の美術館
解体の旧家に残る鉄線花
薔薇大輪市電一本やりすごす
鳴く練習飛ぶ練習を鴉の子
豊平川少し来ぬ間の茂りかな

札幌 濱谷和代

短夜や国際電話長長と

打水の乾く速さや石畳
夕さりのテラスの端居ミントの香
溪流の浅瀬の白さ風涼し
頂上のお花畑へあと一步

札幌 大内和憲

万緑を抽づる彩熱気球
たれよりも大き読経や滝行僧
一燭に闇のあつまる解夏の寺
汗の手に勝ちし輓馬の手綱解く
緑蔭におしやべり雀べちやくちやと

札幌 紅露恵子

たくましき穂麦の揺れや農学部
四十雀砂丘の風に声を張る
鷺草を飛び立たせたき星の夜
合掌の背に晩鶯二度三度
道化師の涙の跡や芥子坊主

札幌 大内マキ子

朝霧に首深く垂れ牧の牛
寄り合うて馬たそがるる夏野かな
○人寄せて人恋ふる馬夏岬

海光へ開く蔵窓夏つばめ
沖の雲大き西日を吸ひ込めり
アルバムの亡き父若しラムネ玉

札幌 中鉢弘一

柔かな子の掌にかたつむり
空砲にひと時の黙蟬時雨
声太く蝦蟇鳴き合へる蝦蟇の恋
闇深き藪にひときは螢の火
鷗と鶺鴒小さき岩礁競ひ合ふ

札幌 北浦詩子

針槐袋小路に香の満ちて
夏柳鯉の吐息を崩したり
屋根の蜘蛛忍びのやうに急降下
日盛や屋根の緑の際立てる
夏の月火照りの残るビルの間

江別 佐藤哲

夏大根間引きしあとの風の佳し
陽炎へる畦千本と蝦夷富士と
一族の墓碑をま中に田草とる
山鳩のいざなふ小路青葉闇

北の海夏炉を焚きて漁待てり

江別 太田 佳美

えぞにうやバス減便のふるさとへ
山腹に町の花文字緋衣草
十勝晴れ逃水の中トラクター
油照辻の軒端に給水す
走り根の足裏を衝けり青葉闇

新潟 高橋 ひろ

雲多き日のまま暮れて地虫鳴く
鮎の串すいと遠火へ刺し直す
花減つてしまひし庭へ夏の蝶
手水場に十葉挿して蕎麦処
遠雷に猫がうろうろ落着かず

新潟 高野 松風

つぎ足せるコップの銘酒夜の秋
炎天や禰宜の杳みな黒びかり
半畝は蔓先変へて藨を挿す
新聞に揃へたる丈夏わらび
花ざくろ紙垂まつさらのさざれ石

新潟 森山 暁湖

鯉幟尾を撥ねあぐる風軽し
釣り上げし鮎瑞瑞し笹の上
鬼やんま首をくるりと回しけり
○青臭き匂ひに明くる栗の花
密度濃き青田の風でありにけり

益子 光岡 れい子

雨を得て紫陽花藍を深めたり
道鏡の墓碑にびたりと梅雨の蝶
曇天を弾くポンポンダリアの黄
風湧きて百の風鈴躍りけり
夏の月声張り上ぐる琵琶奏者

芳賀 大村 かし子

明易し鴉の声の囁れたる
雲の峰目は釣糸に大公望
異人館丸ごと包む蔦青葉
ジェット機の音のみ聞ゆ梅雨曇
ほめられて二日つづきの胡瓜もむ

白水を鉢にたつぷり薔薇日和
宇都宮 阿久津 勝利

湯の町に夢二の句碑や梅雨の月
蛇衣を脱ぐ山城の野面積み
汗どつと韃に唸る鍛冶屋の火
隣家よりオカリナの音梅雨晴間

栃木 上岡 佳子

若楓盃に一枝水みくじ
空に浮く木の葉一枚蜘蛛の網
香の残る青き茅の輪や笙流れ
岩といふ岩に白糸音涼し
吹き抜くる三龜山の風や夏座敷

佐野 増田 幸子

○馬場の土深く剥れて梅雨に入る
梅天へ殊にをがたま枝張れり
星あはし咲きのぼりたる烏瓜
石文に「努力一貫」振れ花
花合歓や門川の音暮れゆける

佐野 加藤 季代

滝となる水ゆるやかに躊躇はず
遮断機の上る早さや雲の峰
インターホン布教の男女夕焼負ひ

遥遥と小さき木箱さくらんぼ
今日といふ一日消えゆく遠花火

佐野 阿部 澄

迷ひなく紫陽花の毬剪つてをり
足腰を伸ばせるベンチ文字摺草
半夏生ごとんと曲る路線バス
○大甕をとび出しさうな目高かな
奉納の錨六尺木下閣

佐野 芝宮 留美子

青蘆の丈の揃はぬ遊水地
万緑や川ゆるやかに落合へり
心太三龜山麓めぐり来て
花合歓や山ふところに醸造所
青ぶだうの山正面にテラス席

佐野 島田 和枝

古書市や糺の森の緑蔭に
岩陰に千振の花小刻みに
○大谷石の鑿跡涼し石切場
板の間にはりつく足裏梅雨じめり
天辺まで青蔦絡む杉木立

佐野 売 野 緑

野萱草ホフマン窯へ狭き道
句帳手にメタセコイアの青葉風
青蘆原課外授業の声響く
正面に梅雨の満月雲流る
親につく雉の子八羽一列に

佐野 店 網 洋 子

葉の先をびよんと飛びたる行行子
渡良瀬のはるかに富士の夏霞
立葵白ばかりなる骨董屋
靴に乗る豆粒ほどの青蛙
はぐら瓜えぐり貫く鉄砲漬

足利 大 木 茂

落雷の白き火球が厨飛ぶ
蜻蛉生る裾廻に笑みの道祖神
牛蛙息を短く殺しけり
雪溪を渡る木道ゆるびたり
夏霧の耳元過ぐる音幽か

土浦 澤 照 枝

夕螢沢音静か里静か

花合歓の風の重たき上州路

朝風に弁当配る遊覧船

船溜り風をこらふるやごの殻

ふはふはと波に飛び来て川蜻蛉

加須 茂 木 弘 子

芭蕉句碑薄き台座の苔青し

踏んで知るやまも熟るる頭上かな

餌を漁る鶴の幼鳥青田なか

パツパツの袋に目高売られをり

しなやかに蓮の青葉の翻る

さいま 山 本 右 近

殻透きて雨呼ぶばかり蝸牛

突堤は江戸の石築き夏つばめ

川風を招くやからすうりの花

○竜宮城洗ひ金魚の水替ふる

贗作を疑ひつつの土用干

所沢 三好 かほる

アズレージョ掛けある駅や晩夏光

老鶯や天窓ひらく山の家

先づ麦茶煎じてをりぬ朝厨

かみきり虫古木の洞に住みつきぬ
県境の山ふとこゝろに袋掛

所沢 南 雲 秀 子

禪寺や青葉の山に勅使門

施餓鬼会に老師出で来る車椅子

二階まで藍の朝顔咲きのほる

軒下の子燕せはし保育園

梶子やビル林立の虎の門

千葉 田 中 道 江

鉄落す音のくぐもり梅雨湿り

彫りうすき青面金剛梅雨曇

砂糖壺のべたつき拭ふ小暑かな

梅雨明や足場解体始りぬ

釣具置き川泳ぐ子の着のままに

千葉 松 浦 陵 保

朝顔の観察日記 早二冊

蝸牛目玉伸ばして何を見る

縄張りの水辺往来鬼やんま

「さとうきび畑」独唱小暑の夜

川狩や四人がかりで獲物追ふ

地震半年能登の火祭猛りたる
汗滲む輪島塗師の指の先

千葉 喜多恭仁子

夏木立葵の紋の鬼瓦

○「九十歳。何がめでたい」猛暑来る

短冊に「安楽死」と有り星祭

千葉 大 月 玲 子

老鶯やラジオ体操一と二と

麦茶一杯宅配の青年へ

華やかに凌霄落つる高さかな

白靴や日本橋から銀座まで

湧水に浸す両手や帰省の子

酒々井 竹 澤 竹 里

トドワラに玫瑰咲いて北岬

列成すや鱈の開きの天日干し

漁終へて浜昼顔に網を干す

蟬鳴くや埴輪の口はおちよほ口

草庵に紅一点や山桜桃の実

佐倉 内 海 保 子

金盃に夜店の亀の売れ残る

筑波嶺の裾一面の青田波
からす団扇すもも祭の家苞に
息ながき夏鶯や法華経寺

○朝顔市に玄関貸して仕舞屋

佐倉 大内 佐奈枝

炎天を来て炎天へ救急車
ふうはりと草に散り浮く合歡の花
朝市の傷ありといふ桃甘し
半割の竹の青さや夏料理
硝子器の洗ひ物増ゆ夜の驟雨

佐倉 三屋 英俊

バス見えて片蔭の人みな動く
放送のくぐもる声や街溽暑
涼しさやフルーツ包むセロハン紙
板の間にごろり大の字背涼し
○夕立に土総立ちの匂かな

佐倉 横川 良子

○荒梅雨や何処へも行けぬ沼の舟
黒南風や棟上げ急ぐ槌の音
武家屋敷裏に二畝茄子の畑

ゴンドラに並ぶ揃ひの夏帽子
戦世の終りは見えず夜光虫

四街道 奥 太雅

夏帽の胸に小さな夏帽子
玉虫の飛ぶに翅音乾きをり
かんかんと西日の中に組む足場
余所の猫まどろむ庭の木下闇
梅雨の蝶寸の止み間を逃さざる

四街道 塗木 翠雲

逆さまに守宮貼り付く出窓かな
耳澄ますジヨッキビールの泡の音
奥能登の復興遅遅と半夏雨
ぽつかんと皆口開く揚花火
燕の子口菱形に開きけり

船橋 山下 良江

曇天を突く雑草の勢ひかな
梅酒びんの口よりこぼす梅ひとつ
雑草のひたと動かぬ夏の午後
隣家の窓へ高高泡立草
○山鳩のぐるぐるぼつば梅雨に入る

船橋 赤堀 洋子

合歓咲いて農家の庭は田へ続く
白も黄も海風に揺れ忍冬
勝浦や青葉若葉が日を弾く
黒揚羽海風に乗り経に乗り
鐘撞いて再会約す夏ゆふべ

船橋 久保村 淑子

雲の峰みりん工場の白タンク
炎天へクレール右向き左向く
夏鴨の出払つてゐる沼広し
風抜くる方へ傾いで夏の葱
立葵 女子高生の長き脚

船橋 片桐 帆一

習志野の野馬土手高く立葵
木洩れ日の盃金魚の浮いてこい
古エアコン使ひ気楽に生きてをり
恙なし夫婦並んで遠花火
中継の巨人が勝つて缶ビール

船橋 宮本 加津代

咲くものに降り止めばすぐ梅雨の蝶

今少し眠らせておく梅酒かな
木洩れ日を溜めて水引草の赤
出来立ての南瓜スープに銀の匙
揚羽蝶客にあらねど庭を飛ぶ

船橋 中嶋 久登

日本海へ梅雨の濁りの信濃川
蓮池や薄きピンクの風渡る
残りし尾びくびく跳ぬる青蜥蜴
鬼子母神曲るその先朝顔市
星祭青春十八切符手に

柏 山本とく江

群れ動く無尽の目玉金魚の子
注連飾る丁字屋の軒燕の子
○かたつぶり句碑の一文字隠したり
路地曲り味醂の香る風涼し
鬼灯の鉢と乗り合ふエレベーター

柏 内田 郁代

水揚げの鯖青青と放らるる
大利根を越えて目にしむ大青田
ぬれぬれと日差しを返す青蜥蜴

少年の平和の詩や沖繩忌
梁の巢を溢れてゐたり燕の子

和 古川京子

万華鏡しづかにまはる涼しさよ
灼くる地に影がばと脱ぎ離陸かな
暮れかけてなほ真つ青な遠嶺かな
カナダイアンロックガーデン萼咲いて
対岸は灯ともしころや蚊喰鳥

流山 穂 莉 照 子

半夏生手押しポンプのきしきしと
草陰に纏れて沈む梅雨の蝶
どこからも見えてボートの二人かな
水遊び子は総身を笑顔とし
三伏の銀杏は乳をふくらませ

東京 名 和 政 代

熱帯魚ブルーの群れの棒立ちに
○ボタン屋はビルの谷間に釣忍
あつあつの酢飯に混ぜる新牛蒡
人はみな後ろ姿や夏の夢
紙魚きらり朝の日差しの布表紙

東京 藤 田 裕 子

向き合うて鉢の金魚に齡問ふ
百合の香にめざむる真夜や八十路なる
校門に七夕竹や都知事選
稲妻に華ぐ鎮守の杜の闇
母の服ゆるかにまとひ墓詣

東京 島 野 ひ さ

夏旺ん今日の昼餉はカレーかな
はたた神洗濯干場を叩き去る
ひまはりやラジオ体操今日も晴れ
鉢の茄子話しかけつつ水注ぐ
日光の参道ばさと杉落葉

東京 加 賀 葉 子

箱眼鏡のぞく背中や川漁師
蟬時雨川音包み青空へ
○朝顔市ガラスペン屋は今日休み
ばね指へゆつくり注射ソーダ水
干されるるシャツに蟻螂吹かれをり

東京 久 留 島 規 子

遣り過す背に梔子の香りけり

夏至の雨烈し昼餉は残り物
副都心被ふ黒雲大夕立
日盛や蛇口の水の沸きあたる
少年の山伏問答風涼し

東京 下 嶽 孝 一

船を曳く舟を一閃夏つばめ
葉の皿に盛れり木曾路の夏料理
○風の読む胸の詩集やハンモック
球場に声湧く一打雲の峰
初生りの胡瓜供ふる三回忌

東京 草間 三香子

糠床に炒り足す糠や梅雨の雷
竹箒ふし折り返す天道虫
電線の鴉口あく朝曇
水馬のすいと流れを逆へり
内定と声の弾むや雲の峰

東京 岡村 純子

水打ちて父母を待ちたり朝の風
朝採りの籠の葉ものに露光る
露天の湯竹風鈴の青き風

折紙の鶴亀吊し星祭
大夕焼犬の添ひたる乳母車

東京 桑原優美子

反戦のプラカード持つ夏帽子
正論も邪論も論破ビール乾す
緑蔭のベンチ仰臥のホームレス
○炎天を来て投票の皆無言
水中花古書街裏の純喫茶

東京 三村 紀子

格子戸の町並流す踊かな
盂蘭盆会笹の葉寿司の甘酢の香
いぐさの香深く吸ひ込み昼寝かな
重さうに芋虫付けて草の蔓
蔓掴む足の数数とこよむし

東京 小池 清晴

黒南風や都知事選挙の掲示板
海までの標識2キロ夏の雲
鯉走る天神の池梅雨晴間
霊園の石と言ふ石みな灼くる
芋殻焚く人ひとりづついなくなり

武蔵野 砂地 宏子

基地ありて何の沖繩慰靈の日
片蔭や親鳩の来て子鳩来て
紫陽花の花叢縮みゆく真昼
せせらぎの小橋の向う蟬時雨
○高く高く赤きカンナの花は火矢

昭島 疋田 華子

夏の朝桜大樹の息づかひ
一本は老いの楽しみ茄子の花
音立てて露地の草打つ半夏雨
昼顔や風呂焚く薪の山積みに
百日紅小石蹴りつつ下校の子

町田 広瀬 俊雄

入笠山の湿原おほふ君影草
湿原の流れに添へり九輪草
一面に匂ひただよふ栂の花
眼の前に八ヶ岳の山並夏の雲
パラボラの先へと続く雲の峰

町田 桔梗 純

豆菓子の届き猛暑を籠りけり

菊坂を上り一息アイステイ

烏骨鶏の小屋の前なる茅の輪かな

急坂や夏鶯の二度三度

荒梅雨や古きアルバム繰るひと日

日野 喜多尾 明子

雨樋をあふるる白雨電話鳴る

羽化の蟬桜の幹へたどり着く

補聴器を差し込んでより蟬時雨

キッチンの電源ランプ熱帯夜

金魚玉もまたもや同じ夢に覚め

横浜 西本 才子

店先に酒樽を据ゑ鰻焼く

集魚灯まぶし烏賊釣舟送る

膝ついて子等取り困む蟻の列

帰省子の箱眼鏡提げ利根川へ

夕日浴び池へなだれて片白草

横浜 大橋 雅子

七夕竹動物園より伐り出さる

ひらひらと蜜柑の木の間黒揚羽

にいにい蟬朝の網戸に息潜め

○夏休み大荷物提げ下校の子
二年経し梅酒まつたり琥珀色

横浜 山崎 郁子

○夏の星敗戦聞きし引揚げ船
初紫陽花土手に盛りて通学路
童らの学校畑に甘藷植う
梅雨入に内庭濡らす加賀温泉
人気なき漁村に大き夏の波

横浜 田賀 椽 恵

昼顔の絡みて咲けり基地の柵
凌霄花散りて狭庭の華ぎぬ
大空へメタセコイアの緑かな
遠山に雲のとけゆく夏野原
少年の言葉短し日日草

横浜 三木 豊子

○夏瘦の頸に重たきとんぼ玉
夏つばめ青信号へ一直線
炎天へ梯子抱へて庭師かな
お縁日百の風鈴百の音
這ひ這ひの一瞬止まる夏座敷

川崎 新妻 奎子

草笛を吹く時漢眼閉づ
梅雨菌触るれば脆く崩れたり
籐椅子に乳飲み終へし児と眠る
住み古りぬ青紫陽花の多き街
子規庵のそちこちに焚く蚊遣香

川崎 大久保 進

ひと滴舐めて飛び立つ梅雨の蝶
黒南風や菩薩の顔に鳥の糞
サイレンの音に寝返る熱帯夜
芋焼酎無骨な氷沈ませて
○円陣の解けて虹立つ河川敷

鎌倉 恒川 清爾

風鈴やへミングの曲耳になほ
えごの花隣いつしか逝かれけり
白南風や江ノ電の窓開け放ち
荒神輿かけ声揺す路地と路地
くちなははや社の鏡曇りたる

横浜 織田 みさゑ

梅雨終り頭並べて句会かな

午前三時窓うつすらと梅雨晴間
大音響 天竜川の大花火
山の端に静かに沈む白き月
六月と云へば空見る日課かな

伊勢原 佐藤 和子

跳べさうで跳べぬ小川や青胡桃
鬼百合や人影の無き昼の路地
東京に今も馴染めず心太
遺跡掘る汗の吹きだす首根つこ
阿夫利嶺へ窓を開きて夏料理

静岡 大村 峰子

夕立の匂ひありけり草戦ぐ
振花の素直に風を廻しをる
駒繫縄文土器の出でし丘
夕蟬のフォルティッシモの声一度
幽霊草お諏訪の杜の登り口

静岡 海野 みち子

新聞の訃報に友の名梅雨深し
草の中猫の腹這ふ炎暑かな
鉄砲百合一輪咲けり兵の墓

葱刻む男厨に音軽く
燕去り元の山家となりにつけり

静岡 宮崎 知恵美

麩に飼ふ目高を覗く襦袢の子
仙人掌の花を窓辺に喫茶店
○えごの花散りて真白き峠かな
柚の家の庭にカラーの黄のまぶし
山寺へ階千段夏の空

静岡 望月 敏男

日焼せる天地返しの腕かな
反り返り大口開く蕨
阿羅漢を汗の眼に打ち仰ぐ
滝殿の作務衣の漢背筋伸ぶ
食堂じょうどうの葉の香れる夏料理

静岡 藤原 千代子

停止線にびたりと電車朝涼し
蟻の列ベンチにひらく求人誌
サングラス寡黙な夫となりにつけり
蚊遣香尽き推敲のまだ半ば
○明易し窓辺の鳥の入れ替る

静岡 萩野加壽子

紫陽花の頷き合うて雨楽し
明易や柱時計の螺子を巻く
向日葵や光の迷路抜けて海
片頬を手風になます螢狩
日雷句帳に影の生れけり
○残業の耳に数ふる遠花火

静岡 小川明美

田植機の泥の乾ける村小昼
○軽トラに杵と鍋と蚊遣香
農小屋に空の鳥籠青田風
図書館の窓に新樹の戦ぎかな
開け放つ天守の窓へ若葉風

静岡 藤本節子

駅ごとに薫風を乗せ鈍行車
黒日傘さしてをのこの大股に
病室の固きベッドや梅雨の月
○整然と並ぶカルテや熱帯夜
点滴の管に繋がれ梅雨の底

静岡 大長文昭

竹の皮脱ぐや宗長墓所
夭折の父の日記を曝しけり
畦に背丸め鎌砥ぐ草刈女
杉山に三光鳥を聞き澄ます
川祓水面を舐むる塔婆の火

静岡 加山ひさ子

梅の実の熟す匂ひに寝落ちけり
髪切りて少年めくや蔦茂る
釣堀の水に疲れやひと日終ふる
切れさうで切れぬ鼻緒や盆踊
霊山に法螺の符や山開き

静岡 石川裕子

ただいまの頬の真つ赤や麦茶乾す
台所に昼間のほてりアツパツパ
友の死を会報に知る梅雨の星
一太刀に注連縄きらり山開き
バス停は図書館前や花木檜

静岡 本多ひとみ

海風に吹かるるままや棕櫚の花

夏蝶や人影の無き草の径
ジーンズの裾を占領草虱
溶岩の碑の窪みに一つ木の実落つ
木洩れ日の揺れゐる処曼珠沙華

静岡 杉澤

修

山氣満つ滝音登る杉木立
天井の五色の幣の堂涼し
風鈴の千の奏でに千の風
山鳩の声湿りたる青葉闇
九十九折山あぢさゐの青しづく

射水 成瀬真紀子

五月雨や森に獣の匂ひして
あの日から半年茅の輪くぐりけり
茅の輪くぐる背に切麻さりぬさ付けしまま
形代の神通川行く早さかな
蜘蛛の罫に鳥の和毛と雨粒と

金沢 中條睦子

撫で肩は母ゆづりなり夏衣
太宰忌のまだ色に出ぬ四葩かな
あご出しはたらちねの味冷素麺

○白足袋のこはぜを外し夕端居
水中に日向日陰や錦鯉

金沢 今越みち子

祝宴や刺身のつまに金魚草
梅雨深しブルーベリーのジャム作り
噴水の女神と天使空真青
暮れ方の風死す庭にデデッポッポ
つるばらの花屑掃くへ暮の鐘

金沢 伊藤美音子

緑蔭や三人寄れば加賀ことば
花椎のけだるく匂ふ午後三時
赤腹を水の光に見失ふ
○更衣手にかからめ切る躰糸
近江町市場に紫蘇の荷のどつと

金沢 高田たみ子

地震跡や高高と咲く立葵
自転車の荷台に括る大西瓜
山門の黒瓦照り夏の雲
熱き砂足にくひこむ西瓜割り
回廊のつやめく床や蟬の声

金沢 豊田 高子

千畳の蓮の浮葉に日の雫
青芝を転る父子地の自転
藍の糸干す乱鶯の声しきり
茅屋根を燦らす杉葉梅雨曇
子とつなぐ右手のしめり青葡萄

金沢 松井 佐枝子

検番のしづかな朝藤は実には
朱格子の人幅の路地花ぎほし
はんなりと暗がり坂の濃あぢさゝ
ぐらぐらと棒茶たぎる香加賀の夏
取つて置ききの白磁へ八重の莪菜を

金沢 石川 純子

草蔭にひそみ明滅恋螢
雨の朝水輪の囲む未草
開け放ち風鈴の音存分に
鞍外れ馬の噴き出す白き汗
夏帽子ゴムひもつけて幼かな

金沢 河野 尚子

手に触れてつまべにの種弾けたり

新緑の城址眼下に日本海

青田から青田へ水の音微か
ふる里の村の名消えて合歡の花
石清水掬へば苔の匂ひせり

金沢 道場 啓子

花水木遠き山並青みたり
神さぶる白き白山田草取
先達の言の葉揺るる花檮
雨降りていよよ明るき立葵
梅雨晴やひとしきり鳴く朝烏

金沢 杉本 年虹

祭獅子外つ国人を丸嚙り
桜実に歩度ちぐはぐな老い二人
河鹿鳴く伴天連屋敷跡の森
ほうたるや極楽橋のむかうより
包丁を嚙みて離さぬ南瓜かな

金沢 南 恵子

あぢさゝみに金沢主計町触れ朱格子の路地づたひ

○アイロンの蒸気噴き出す梅雨入かな

雲間より日差しときどき梅雨の蝶

美術館へ青水無月の森を抜け
味噌汁の生麩ふくらむ梅雨入かな

金沢 松下 信子

○黒揚羽風の四阿一巡り

白磁器にサラダ盛りたる涼しさよ
草むらにポール置き去り半夏雨
雨粒をのせ額の花空の色
夏つばめ雨意の旧道飛び交へり

金沢 北川 禮子

石仏へ水琴窟の音涼し
梅雨晴や一ツ灸の熾立つ
夏つばめ友禅流しの川掠め
雲の峰牧草ロール積み上げて
ブルーシート被ふ屋並や梅雨きざす

内灘 塩井 志津

マリアカラスてふ紅薔薇や風の声
薔薇園の土ふつくらと黒黒と
戦乱の子ら飢ゑに泣く麦の秋
筵旗に守られし地や小判草
近江町市場すり抜け親燕

七尾 谷 渡 末 枝

針箱に縫糸絡む半夏生
朝顔にことばをかけて水かけて
冷し酒牛を手離す話など
夏雲や自給自足の山羊と鶏
梅雨明や輪島塗椀叩き売り

津輪 河原 昭子

○あれそれで通ずる会話とこゝろてん
今朝採りしばかりの茄子の鳴焼ぞ
明易のホームに髪を梳く女
宝もの秘めてゐるやも黴の蔵

敦賀 倉谷 ます美

籐椅子に眺むる入り日瀬田の宿
争ひの絶えぬ日今も沖繩忌
黴臭き舍利堂幽き木乃伊仏
○眼をこらし糸口さぐる糸取女
ユツカ咲く寺に蓮如を偲ぶ石

敦賀 鶴田 勝子

曲屋の畳のへこみ黴にほふ
慰霊碑に父の名見つけ沖繩忌

葉屋の古き看板梅雨じめり
地を染めて楊梅落つる高札場
座繰機を十指巧みに糸取女

敦賀 中川 雅月

麦秋や青一条の新幹線
縁側に籐椅子置きて至福の書
糸取女糸口手繰る芒の先
繭一つ千メートルの糸を吐く
冷麦の客の揃へり杳脱石

敦賀 中村 優

カンバスに朱色が弾け花柘榴
餌に寄る生簀の鯛の日に灼くる
風死すや「無」の文字託す地藏尊
大鍋の冷麦を競る大家族
繭を煮て糸口もとむミゴ箒

※ミゴ箒：桶の火をとった後の穂の部分
大阪 入山 繁幸

地藏盆老人たちの憩ひの場
得意気に母追ふ小さき日傘かな
暑中見舞無沙汰を詫ぶる長電話
遊船のデッキに応へ手を振る子
日覆の窓マネネキンの足ばかり

徳島 福島 吉美

開け放つ堂に匂へる藺座蒲団
○ 駈斗張られ庫裡に届きし走り藪
夏霧をまとひて潤む朱の鳥居
夕風に重たく揺るる夏柳
厠窓開けば届く寺の枇杷

徳島 村上 和義

一斉に波を蹴飛ばし海開き
岩の瀬を避けて傾く螢舟
土俵よりどすんと落ちし大暑かな
味噌樽の発酵すすむ熱帯夜
象の鼻だらりと垂るる夕薄暑

徳島 宮西 修一

青鷺の影をたたみて降りにけり
○ 夜店の灯犬が留守番してをりぬ
道場に「お面」一本梅雨あがる
片蔭を散歩の犬に譲りけり
漆黒の闇を打ち抜く火花かな

徳島 平岡 功

山梔子の白の錆びたる雨上がり
雨上がり蜘蛛の罫の城しろがねに

風鈴の雨呼ぶ風にさわぎをり
でで虫の来し方しるす銀の地図
城山の小径遮る青大将

石井 木内 マヤ

溽暑かな真夜中の夢千切らるる
扇風機やさしき風を老犬へ
老犬の寢床に敷きし葎すだれ
夏シャツに風をはらませ下校の子
サイダーを分け合ふ父子塾帰り

小松島 岡田 あゆみ

つぎつぎと人の名忘れ冷奴
万緑へリフトふはりと発ちにけり
びしよ濡れがうれしい子らの水鉄砲
近づけば船虫の散る速さかな
不器用に巻く挿花をいとしめり

室戸 安岡 みさき

ハイビスカスよぢれ正しく花たたむ
忘れたる事を暑さのせゐにして
トロッコの木札の切符避暑の旅
とんぼうの翅のきらりと風を削ぐ
洪滞の町を一喝はたた神

長崎 丸本 祥夫

渡る世を甕の目高のつゆしらず
雪柳つねにどこやらゆれうごく
今植ゑし早苗に風の生れたり
九十九折帯なして飛ぶ杉花粉
黄金週間名もなきホテル聞かれても

西海 山下 敦子

姫女苑うす紫の雨のあと
薄赤き雲を抱ける植田かな
汽笛鳴り続くや海霧の村に住み
ふるさとの梅雨は土間にも水溜り
海の音幽かに村は夏祓

宮崎 中山 宣

雀口に鳥の出這入り夕涼し
不揃ひの枇杷売る熾火山灰かぶり
真向ひに火の鳥望む海開き
特攻兵の父母への遺書や紙魚走る
古時計止りしままに夏終る

宮崎 中山 芳教

太棹の稗搗節や夜の秋
梅雨晴間妻夫鴉の鳴き交し

新しき村とふ里の谷若葉

西原 宮城

勉

実篤の歌碑古びたる木下闇
神田に紅い蹴出しの月乙女

宮崎 鳥居達史

尺蠖の測り尽せし垣あはれ

○一雨につましき母の菲の花

滅塩の醤油にくづす冷奴

夏草や彫りのうすれし開墾碑

妹の名のまだ新しき墓洗ふ

那覇 大湾宗弘

浜木綿の香れる暗き夜明けかな

黙禱す青水無月の只中に

緑雨霽れ光をまとふ蝶の翅

空蟬へ風鳴る午後の眩しさよ

夕風や吊して重き青バナナ

那覇 中本清

沖繩忌路地の白砂を掃き清め

夏霧に濡れて冷たき健児の塔

降伏ビラ踏みて逝きしか芒種ホウスライベ南風

ほろほろとこぼす海光黒揚羽

七月の光が重し旅鞆

子どもらのはだへきらめき夏旺ん

○ひだる神払ひ茶房に入る炎暑

一幅を替へて涼しき寓居かな

院長の芥集むる作り滝

白鷺の脛に波来る夕渚

豊見城 渡真利真澄

避難壕は太古の地底滴れり

風鈴のチロリともせぬ夕べかな

○自足てふ時間簾のこちら側

立て掛けて幽居を得たる葭簀かな

暁を三日開いて蓮散れり

ががんぼの跳ぶ時屈伸念入りに

ベルシ 鈴木波江

誰も来ぬ秘密の水辺川蜻蛉

河骨のすつくと小顔美人かな

大噴水の裸体の像に鳩あまた

葉のかけら掲げて蟻の根方越ゆ

にほひまだ残る花火の後の闇

同人会だより

「万象」オンライン同人句会の参加者募集

オンライン同人句会は、全国の「万象」同人が共に切磋琢磨する場として発足し、今年の7月で3年目を迎えました。PCまたはスマホの簡単な操作で参加することができます。オンライン同人句会に少しでも興味のある方は、事務局へお気軽にお問合せください。

◆オンライン同人句会の実施要領

(句会は「夏雲システム」を使用)

- ① 対象は全国の「万象」同人とする。
- ② 月例で行い、句会費は無料とする。
- ③ 投 句 3句
- ④ 選 句 名譽主宰・主宰…10句
顧問・役員…7句
同人…3句

- ⑤ 投句期間 毎月1日～5日
- ⑥ 選句期間 毎月6日～9日
- ⑦ 結果公開 毎月10日

◆参加申込はEメールで事務局(沢辺たけし)まで。

メールアドレス jundayuu@xd6sor-net.ne.jp
(電話番号 090-7637-5661)

・申込の方には事務局より簡単な操作説明とパスワードを返送いたします。

8月の「万象」オンライン同人句会高地点

| | | | | | | |
|------|------|-------|------|------|------|------|
| 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 10 | 14 |
| 目 | 開拓 | 手をたたく | 祖母の背 | 炎天 | 上野 | 城山 |
| ずれし | 牛舎 | たく時は | 背の蒼き | 尖つて | 発急行 | を丸洗 |
| ピカソ | からつ | 時は揃 | 蒼き弾痕 | てゐる | 十和田 | ひせし |
| の女昼寝 | つぼ夏 | ひて盆踊 | 痕終戦 | たる牛 | 盆帰省 | 大夕立 |
| 覚 | の月 | 盆踊 | 終戦日 | の尻 | 大久保 | 平岡 |
| 江見 | 曾根 | 内海 | 村上 | 内海 | 進 | 功 |
| 悦子 | 満 | 良太 | 和義 | 良太 | 良太 | 和義 |
| (東京) | (静岡) | (佐倉) | (徳島) | (佐倉) | (佐倉) | (徳島) |
| 片蔭 | 来迎 | 杖に手 | 日盛 | 日盛 | 片蔭 | 来迎 |
| なく鎮 | 掛け | 重ね | や生 | や生 | もなく | 掛け |
| 爆心地 | 紅穀 | 重ね | と生 | と生 | なく | 掛け |
| 村上 | 夏座敷 | 夕焼 | し生 | し生 | なく | 掛け |
| 和義 | 江見 | に立ち | ける | ける | なく | 掛け |
| (徳島) | 悦子 | てを | るもの | るもの | なく | 掛け |
| 喜多尾 | 久保 | をり | 黙す | 黙す | なく | 掛け |
| 明子 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (日野) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 船橋 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 久保 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 祥夫 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 祥夫 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 久保 | き | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| 丸本 | 村淑 | 好 | 丸本 | 丸本 | なく | 掛け |
| (長崎) | 子 | き | 丸本 | 丸本 | なく | |



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に人偏(イ)の付く漢字を入れてみましょう。

- 1 みちのくの□達の郡(こ郡)の春田かな 富安 風生
- 2 たてよこに富士□びてゐる夏野かな 桂 信子
- 3 水とりや氷の□の沓の音 松尾 芭蕉
- 4 ご開帳おん身火傷の新羅□ 内海 良太
- 5 □山(やま)に猫(ねこ)ゐやはるは春灯 久保田 万太郎
- 6 おおかみに螢が一つ□いていた 金子 兜太
- 7 □といふ風か牡丹にのみ吹きて 細見 綾子
- 8 にぎはしき雪解雫の□藍かな 阿波野 青畝
- 9 胡桃割る胡桃の中に□はぬ部屋 鷹羽 狩行
- 10 初蝶来□色と問ふ黄と答ふ 高濱 虚子
- 11 ぬかづけば我も善女や□生会 杉田 久女
- 12 かたつむり甲斐も□濃も雨の中 飯田 龍太

- 【正解】
- | | | | |
|----|---|---|---|
| 9 | 使 | 1 | 伊 |
| 5 | 仰 | 2 | 伸 |
| 10 | 何 | 6 | 付 |
| 11 | 仏 | 7 | 何 |
| 12 | 信 | 8 | 伽 |
| | | 3 | 僧 |
| | | 4 | 仏 |

思しいい出ですす人ひと々々

西山 厚 全24回

第20回 【空海】

延暦二十二年(803)四月、遣唐使船は船出した。この時、最澄は乗っていたが、空海はいなかった。それから三十五年過ぎ、次の遣唐使が派遣された時、空海はすでにこの世にいなかったのだから、空海は唐へ渡ることができなかつたはずなのだが……

ところが、瀬戸内海で船が遭難。遣唐使の派遣は、翌年に延期された。しかも、四艘のうちの沈んだ船に乗っていた留学生は、再度の乗船を許されなかつた。その欠員を補充するため、空海はメンバー入りした。延暦二十三年(804)七月、五島列島のおそらく奈留島を船出して、一行は唐へ向かつたが、南方へ流され、不審船扱いされて、上陸させてもらえない。困り果てた遣唐大使に代わり、空海が地元の役人に充てて書いた文章が素晴らしい。特にここが好き。

波に随したがつて昇あつつ沈しし、
 風に任まかせて南みな北きたす。
 ただ天水あまみづの碧あざ色いろのみを見る。
 波に翻ひ弄ろうされ、風に翻ひ弄ろうされ、見えるのは空の青と海うみの青だけ。空の青と海うみの青。まさに空海ブルーだ。

公経社団法人 俳人協会

同人作品の佳句 江見悦子

逢魔が時白ひんやりと山法師 岡本敬子

「逢魔が時」とは、夕方の薄暗い時、たそがれ時のこと。
大禍時の軼で禍いの起こる時刻の意、と「広辞苑」にある。

そんな暮れ方に浮かび上がる山法師の清らかな白さを、「ひんやり」と感じた作者。逢魔が時だからこそ、いささかの不安感や緊張感が感じ取れる。感性豊かな句。

人寄せて人恋ふる馬夏岬 大内マキ子

真夏の太陽のもと、眩しいほどの真つ青な海が広がる。岬に草を食む馬に近付いて親しむ人たち、おとなしく首を振っている馬。野生の馬なのだろう。「人寄せて人恋ふる馬」に、厳しい自然に耐えて生き抜く馬への愛情と共感がある。

大麴をとび出しさうな目高かな 阿部 澄

大麴を住処として生まれ、育ち、今や生きる力に溢れて泳ぎまわっている目高。そのエネルギーに驚き「とび出しさうな」と表現した作者は、目高の姿に励まされているようだ。

竜宮城洗ひ金魚の水替ふる 山本右近

金魚の水槽に置かれた橋や石のオブジェ、その中からまず「竜宮城」を取り出して汚れを落とし、水を替えたというのである。水槽の世界が澄みわたたり、生き生きと尾鰭を揺らしている金魚の姿が見える。具体性が光る。

「九十歳。何がめでたい」猛暑来る 喜多恭仁子

ベストセラーになって話題を呼んだ佐藤愛子の「九十歳。何がめでたい」を読み終えた作者。齒に衣着せぬ悲憤慷慨調の愛子節に笑ったり、しんみりしたり、励まされたり。この夏の猛暑に敢然として立ち向かおう、と決心した作者の心意気が伝わってくる。

かたつぶり句碑の一字字隠したり 山本とく江

句碑にはどんな句が刻まれていたのか。一字一字に目を凝らしていると、一匹の蝸牛を見つけた。ちょうど読もうとしていた文字の上にいる。古びた句碑とかたつむりの取合せが面白い。蝸牛はどこに行くつもりなのか、どいてくれるまで動けない作者。端正な即物具象の句。

炎天を来て投票の皆無言 桑原優美子

「皆無言」に共感した。炎天下の投票当日の街は、前日までの喧騒と打って変わって静か。投票所の入口を入ると、選挙人名簿との照合、用紙の受取り、候補者名を記載して投票、出口へ、と粛々と一巡する。静寂の中、一挙一動が見られている中で投票を済ませほっと一安心。投票所の場面を詠んだ珍しい句。

夏の星敗戦聞きし引揚げ船 山崎郁子

作者の敗戦時の体験として鑑賞させて頂く。中国葫蘆島からの引揚げ船だろうか。日本に戻るその船上で、敗戦を告げる詔勅を聞いたのだ。海上でのこと、雑音も大きく十分には聞き取れなかった玉音放送だったに違いない。

それから79年が経過し、夜空に仰ぐ夏の星に、引揚げ船で

見上げた光景を思い出している作者。感慨深い句。

夏瘦の頸に重たきとんぼ玉 三木豊子

とんぼ玉は、穴が空き柄が入ったガラス玉のこと。メソポタミアやエジプトで紀元前から作られていた。日本でも古墳時代の副葬品に見られ、権力の象徴として或いは魔除けとしても使われていたようだ。「夏瘦の頸」と「重たきとんぼ玉」の取合せの面白さ。

残業の耳に数ふる遠花火 荻野加壽子

仕事場に遠花火の音が響いてくる。とうに終業の時刻を過ぎ、部屋に残るのは自分一人。無意識に花火の音を数えている。省略の効いた、郷愁を誘う一句である。

アイロンの蒸気噴き出す梅雨入かな 南 恵子

上五中七で「アイロンの蒸気噴き出す」と思いがけない場面を提示して読者におやつと思わせ、下五で「梅雨入かな」と種明しをしている。これから始まる長い梅雨を過ごす覚悟が「噴き出す」にある。

あれそれで通ずる会話とこゝろてん 河原昭子

「夫婦だろうか。長年労苦を共にして数十年、今は別段詳しく話さなくとも、「あれそれ」と言うだけで会話が成り立つ。お二人向き合って喋っているのは「とこゝろてん」。洋菓子でもなければアイスクリームでもない。まさに庶民の味、夫婦の味なのだ。しみじみとした句で諧謔味があり楽しい。

眼をこらし糸口さぐる糸取女 倉谷ます美

敦賀支部では、福井県に残る昔ながらの製糸工房を吟行な

さったようだ。眼前の風物をスケッチすることから始まる吟行句は、句会等で推敲されることで磨かれ、独立した作品として完成する。是非折折の吟行を続けて下さい。

掲句は素直なよくわかる句。糸取女の眼と一つになって、煮られた繭から糸口を探している作者、その一体感こそが写生の醍醐味である。

ひだる神払ひ茶房に入る炎暑 宮城 勉

「ひだる神」と聞いて、水木しげるの漫画を思い出した。

人間に空腹感をもたらす憑き物、妖怪の類のことだ。

昔の人は、峠や山道を行く旅人が急に猛烈な空腹や疲労を感じて動けなくなってしまうことを「ひだる神」に憑かれたと考えた。今ならこの状態は、血糖値が下がり過ぎてエネルギー不足になったためとわかる。この句、炎暑の中の空腹にひだる神を追い払おうと喫茶店に入ったのである。自分を客観化、戯画化した俳味ある句。

自足てふ時間籬のこちら側 渡真利真澄

「籬」は、仕切りを取り外した空間をやわらかく遮る、伝統的な夏のしつらい。自然と近しい沖縄の伝統家屋には籬がよく似合う。籬を垂らしたことで風が通い、ゆったりと過ごす心持は、こまごまとした日常と切り離された、まさに「自足」の時間だ。「こちら側」が言い得て妙。

マンション住まいの筆者も、籬を垂らした部屋で蚊帳を吊って寝た祖父母の家での夏休みを思い出した。

葛ざくら 岡本敬子

歩いてても歩いててもなほはまなす野
 にしん番屋海をそびらに海霧のなか
 網揚げの声そらみみに夏の波
 舟でゆく海の巖いはまに雨つばめ
 声明しやうみやうのやうな蝦夷春蟬のこゑ
 空のどの色も降り来る手毬花
 夏萩の小さき紅の触れはなれ
 山裾をうす紫にじやがの花
 ひらがなのいこひの時間葛ざくら
 ブラウスの貝のボタンに秋の風



北の大地も夏の盛り。
 短い夏だが、短いがゆえ、
 森羅万象すべてが、刹那の
 の夏を懸命に生きる。花花
 は爆発的に咲き、樹樹も炭
 酸同化作用に貪欲。七夕が
 あり、海びらきがあり、夏
 休み、お盆があつて大人も
 子供も忙しい。
 それでも、灼けつくよう
 な炎暑の日はほんの数日で、
 穫り入れの後天空が急に高
 くなつたのを感じるように
 になると、空の一角にうるこ
 雲が現れてくる。ある日、
 襟もと胸もとに秋の風がや
 つて来る。

蟬時雨 丸本祥夫

蟬の穴公園囲み平和像
空蟬の軽くなりたり空気より
葉の裏の空蟬の背にうつせみの
午前中の齡たけなは蟬時雨
敵はずとみての逃亡蟬時雨
枝移り刻惜むかに蟬の鳴く
命ある限り鳴きたる蟬時雨
蟬時雨昼休息のありにけり
夕蟬の鳥の餌となりにけり
雄雌も仰向けとなり蟬果つる



思い起こすと子供の頃から爺さんになっても好奇心が旺盛のようだ。萩本欽ちゃんじゃないがあらゆる事に「何でそうなるの」といつも疑問がわく。

蟻の列を見詰めていると、母が「何しているの」「蟻の行方を観察中」。

広告の仕事柄、誤字脱字等の最終校正が天職の様だった。今でも職業病となり残っている。

真面目に取り組んだのは五十年目の仕事と四十年前に始めた俳句。

俳句、俳友はわが人生の唯一の財産です。

茶 摘

大村峰子

静岡市葵区在住の大村峰子さんは句会での指導「俳句は眼前にあり」を実践しているという。今回は江戸時代初期から茶の栽培が行われ、特に「御茶」と呼ばれ將軍家への献上茶として名高い井川を訪ねて句を詠んだ。

増水の湖見下ろして茶を摘めり

井川は標高が高い。南アルプスの山懐に抱かれてダムによる井川湖には吊橋や渡船があり、ゆったりとした時間の流れを感じる。作者はエメラルドグリーン湖面を見下ろしながら井川の茶を摘む情景に感動している。

雑急ぐ湖へ出る径尻振りて

草原に住む習性のある雑が、湖へ出る径を尻を振り振り歩く姿を見た。一瞬捉えた作者の眼前写生の句である。朴葉餅箆ごと届く小春かな

お茶を作る農家が最近すっかり減ってしまったが、街に暮らす次世代が休日を使い頑張っている模様。作者も小春の一時に朴葉餅を一緒に御馳走になったのだろう。

合流の水の清濁花胡桃

井川湖へ注ぐ山からの水の合流地点の清濁の流れの岸に、作者は花胡桃を見付けた。胡桃は落葉高木で雄花は緑色、雌花の花柱は帯赤色で作者は色の対比を楽しんだ。

対岸より赤翡翠の声震ふ

翡翠は背・腰は美しい空色で「空飛ぶ宝石」とも呼ばれる。作者は全体に赤い赤翡翠を見付けた。湖に沿った樹枝の上から魚を狙い、見付けると急降下して捕える。

夏 雲

中嶋久登

千葉県船橋市在住の中嶋久登さんは今回、房総半島を横断する旅に出て季節の花を愛でながら南房総の句を詠んだ。JR内房線の五井駅から小湊鉄道に乗り、終点でいすみ鉄道に乗換えて太平洋洋を目指す旅となった。

無人駅のトイレの花瓶白牡丹

小湊鉄道の旧国鉄型車輛に昭和レトロを感じる。一日の乗降客が数名の無人駅が幾つかあり、春の桜や菜の花の時期には多くのカメラマンや鉄道ファンが集まるという。作者も途中下車して楽しんだ。無人駅に大きなトイレがあり、誰が活けたか花瓶に白牡丹があったという。

麦秋や下り十時のディーゼル車

小湊鉄道もいすみ鉄道も気動車である。小湊鉄道は五井方面が上りで房総半島の中央部・終点上総中野駅へ向けてが下りとなる。麦が黄金色に熟して穫入れどきの房総の野が窓の左右に広がり綺麗だった。

夏雲の太平洋へ口ーカル線

上総中野駅で始発に乗り換え、いすみ鉄道はJR外房線の大原駅へ向けて上りとなる。房総の山の中を走る。沿線にはいろいろな草花の景色が移り変わる。車輛の左右全く見飽きることがない。首が疲れたと作者はいう。

元寺領この青田から渚まで

終点大原駅を出ると夏雲の湧く広大な太平洋が広がっていた。大原には幾つもの寺や神社があり、元寺領だった青田がずっと渚まで続いているのを作者は目にした。

第二十二回万象俳句賞 発表

万象俳句賞 空の不思議 伊藤美音子



伊藤美音子氏

次点 茶 摘 伊東文恵

佳作 辺土の桜 松田好子

佳作 鳥 杉澤 修

第二十二回万象俳句賞は選考の結果、右のとおり決定しました。

万象俳句会

空の不思議

伊藤美音子

略歴

昭和19年1月21日

石川県金沢市生まれ

平成4年「風」入会

読売句会で石黒哲夫先生の指

導を受け、白菊句会で中山純

子先生、中條睦子氏の指導を

受ける

平成14年「万象」創刊に参加

平成22年「万象」同人

俳人協会会員

現住所

石川県金沢市直江河北1-42

受賞の言葉

出航の銅羅の序破急春立ちぬ
春風に乗りくる鷗脚そろへ
夜の色にまぎれはじめし桐の花
今年竹雨かがやきて降りにけり
一陣の風に青葦ふくらみぬ
明け白み来てせかせかと行々子
河骨の黄花水よりくる暮色
はたた神雀降り立つ草の中
まさなる空に咲きつぐ百日紅

「中山純子記念俳句賞」は欠かさず応募してきました。「万象俳句賞」は20句。5句多いので、とても

法師蟬石仏たちの黙深し
秋の水乱すこと無く鮠の群
遠汽笛尾を引いてゐる夕月夜
断層の波打つ縞や鴟高音
くわりんの実いよよ黄金に大落暉
豊年や絶えずどこかで鳥のこゑ
秋深き影ゆるぎなし夫婦杉
梵鐘の一打に釣瓶落しかな
篁の葉ずれに冬の来たりけり
曙の雲の隙間を大白鳥
碧と言ふ空の不思議や寒の晴

無理だと思っていました。

3月号に主宰の「万象賞」応募の記載に、4句ずつ5組合わせて20句にすればいいと。それに触発され応募させていただきました。

此の度の思いもかけない受賞は、偏に、ご指導下さいました先生方、句友の皆様方の御蔭と受けとめております。

身近な事物は珍しくはないのですが、それを句として立ち上げるには、表現力がとても大事であると思います。感動を素直に表すことが出来たらと思つていますし、そうありたいと心がけています。

拙い作品に温かい評価をいただきありがとうございます。

江見主宰、選者の先生方には心より感謝申し上げます。

茶 摘

伊 東 文 恵

翠巒や茶摘袋の膨らみぬ

茶摘女の葉缶携へ小昼かな

緑さす茶どころ富士を背ナに置き

深爪の疼く八十八夜寒

鳶の笛村の目覚むる茶摘時

茶工場へ軽トラに積む一番茶

橋五つ渡り分校新樹光

風薫るここは駿府の茶町かな

茶畠や真昼の光撥ね返す

茶市場より茶町通りへ若葉風

茶摘女を乗せバスの来る峡の村

利き茶する口元覗く男衆

溪谷の音の高きに藤の花

算盤を弾き新茶の取引所

農小屋に飴色放つ茶摘籠

茶問屋の金賞の板春日濃し

籠背負ふ媪茶摘の打ち合はせ

こだはりは湯加減なりと一番茶

でこぼこと伸ぶる茶の芽を嘆きけり

母に先づ白磁に注ぐ新茶かな

辺土の桜

松田好子

落人の墓ひそやかに紅椿
 手つかずの辺土の地震禍桜咲く
 田の神を送る畦みち露のたう
 初蝶や片付け始む地震あと
 緑豆の味噌を加へて石蓴汁
 潮の香の桜吹雪に電車待つ
 大風車時て能登の山笑ふ
 木漏れ日を抱き藻畳夏きざす
 浜小屋は津波に吞まれ星冴ゆる
 鈍色の海や間垣の虎落笛
 番鷺嘴打ち交はす聖五月
 湾一面船旗集ひあいの風
 能登人の言葉やさしき寒見舞
 閨の浜あばれ祭の火の粉舞ふ

鳥

杉澤 修

鶯の輪の交はるところ風光る
 草に降り草を弾めり雀の子
 小綬鶏や国境なる峠道
 清明や大拝殿を巡る鳩
 空の奥管制塔へ雲雀鳴く
 山雀の枝渡り来る勅使門
 谷空へ慈悲心鳥の声頻り
 地を掠め風を自在に夏燕
 ほととぎす啼く中鳥の古戦場

鶯の明るき雨に老を鳴く
 磯鴨や夕陽褪せゆく海の紺
 懸巢鳴く秩父の森の蒸留所
 杣道の日の射す谷へ瑠璃鷄
 鶴鴿の雨を来たりて雨を鳴く
 鐘楼に鴉の宿る秋徽雨
 甲斐駒ヶ岳に一片の雲鷹渡る
 雨けぶる潮入川に夕千鳥
 谷渡る風の尖りを冬の鵲
 日輪の揺らぐ川面を番鳩
 笹鳴や篁抜くる風の道

選評

また来年を期待

江見悦子

応募40編、久しぶりに40人台の参加を得て嬉しく頼もしかった。同人23名、会員17名の内訳で、会員の増加が目立った。

1位、「空の不思議」伊藤美音子さん。「春立ちぬ」から「寒の晴」まで、季節の推移の中で自然と共に呼吸し、暮らしている20句。「空、風、雨、雷、落暉、日の暮れ」等の様な気象と、「曙、暮色、夜」等の様な時間帯を追って動植物を配し、的確に季語を斡旋している。

即物具象の姿勢を崩すことなく、全体にしっとりとした緩やかな空気が行き渡っている。

春風に乗りくる鷗脚そろへ

断層の波打つ縞や鵲高音

2位、「燕」入河大さん。還暦を過ぎた作者が故郷に戻り、今は誰も住まぬ実家で新生活を始めたという、ストーリー性のある20句。秋の季節に始まり次の秋で終わる一年間を気負いなくまとめた。瀬戸内の穏やかな風光に包まれ、自然体で過ごす日々は明るく軽やか。

栈橋に燕の来たる青さかな
親戚のあれこれそれと益用意

3位、「津軽恋しや」竹澤竹里さん。一読、威勢の良い活気ある場面に圧倒された。前半で北の海峡のまぐる漁、後で津軽の風物を詠み、(へばまらず林檎一籠ぶら下げて)で終幕。かつてまぐる漁で鳴らした漁師が、故郷の津軽で昔を語っているドラマともとることが出来る。「へばまらず」は秋田弁で「それでは、それじゃあね、またね」の意。全編を津軽三味線が鳴り響いているようなリズムが快かった。

冬の海漁場取合ひ闘ぎ合ひ

3月号の「万象の窓」に、作句について、20句のまとめ方について、要点を9点に絞って書きました。応募した皆さんは今一度目を通し、自分の作品を見直して下さい。また句会等で作品を披露して仲間からの批評を受け、句会全体の課題として、次回への足掛かりにして欲しいと思います。

万象賞作家の大内マキ子さんは、受賞後も毎年応募を続けています。「俳句を続けるうえで証」というその姿勢に、敬意を表したいと思います。また、新しく入会された2名の方の応募も嬉しい事でした。

来年もまた、皆さんの力作を楽しみにしています。

| 15 | 13 | 13 | 10 | 10 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 順位 |
|-------|--------|------|-------|------|-----|-------|-------|------|------|------|-----|------|------|-------|-------|
| 津軽恋しや | 五月の牡丹郷 | 出雲路 | 襟裳岬 | 雲の峰 | 燕 | 義仲探訪 | 春から夏へ | 花石榴 | 隠沼 | 台湾の旅 | 鳥 | 辺土の桜 | 茶摘 | 空の不思議 | 作品名 |
| 竹澤竹里 | 辺野喜宝来 | 小池清晴 | 大内マキ子 | 丸本祥夫 | 入河大 | 成瀬真紀子 | 岡本敬子 | 三木豊子 | 中鉢弘一 | 福島吉美 | 杉澤修 | 松田好子 | 伊東文恵 | 伊藤美音子 | 作者名 |
| | 2 | | | 10 | 8 | 5 | | | | | | | 7 | | 選者名 |
| 8 | | 5 | 4 | | 9 | | | | 1 | | | 7 | 6 | 10 | 内海良太 |
| 7 | | | 9 | | | | | 3 | | 10 | | | 5 | 8 | 江見悦子 |
| | | | | | | | 7 | 9 | | 10 | | 4 | 8 | 5 | 小林愛子 |
| | | | | | | | | | 5 | 8 | 7 | 6 | 9 | | 中村千久 |
| | 9 | 5 | | | | 6 | 3 | | | | 10 | | 2 | 7 | 福島せいぎ |
| | | | | 8 | | | 4 | 10 | | 6 | 2 | 9 | | 5 | 前田貴美子 |
| | | | | | 1 | | | 5 | 8 | | 10 | 7 | 6 | 9 | 榎本文代 |
| | | | | | | 10 | | | 7 | | 9 | | 5 | 8 | 神田美穂子 |
| | 6 | 7 | 5 | | | | 8 | | 10 | | 3 | 9 | | 4 | 林陽子 |
| 15 | 17 | 17 | 18 | 18 | 18 | 21 | 22 | 27 | 31 | 34 | 41 | 42 | 48 | 56 | 三屋英俊 |
| | | | | | | | | | | | | | | | 合計得点 |

40編の応募に敬意

内海良太

受賞の伊藤美音子さん（金沢）受賞おめでとうございます。多くの選者の賛同を得てよかったと思います。

私の選んだ作品を左記に鑑賞いたします。

1位 「雲の峰」丸本祥夫さん（長崎）。

3句目の「カヌー漕ぐ」の一句が全体のバランスを崩してしまいましたが、他の19句は、表現の粗さはあったものの、モノで表現した力量で失地を挽回した感じです。長崎の風土を明示した作品に手応えを感じました。

掴まずに横へ払へと鮑取
満潮へ産卵の蟹身震ひす

2位 「花南瓜」奥太雅さん（四街道）

締切り間近1カ月半の囁目を一気に詠い上げたという感じ
です。身近な見慣れた句材から季語との新しい関係性の発見
に努力している姿は尊いものです。

手作りの脚立ぐらぐら袋掛け
花南瓜蔓を日向へ連れ出せり

3位 「燕」入河大さん（松山）

作者は最近千葉から松山へ転居された入河さんと分かり、
新地で詠った乾いた抒情が立体的に見えてきました。

表札を我が名に代へる去年今年

親戚のあれこれそれと盆用意

「茶摘」伊東文恵さん、「浅草祭」中嶋久登さんも良かった。

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|------|--------|-------|-------|------|-------|------|-------|------|------|-----|-------|-------|------|------|-----|
| 31 | 31 | 30 | 28 | 28 | 25 | 25 | 25 | 22 | 22 | 22 | 20 | 20 | 18 | 18 | 17 | 15 |
| 好 | 橋 | 苔の花 | 徒然に | 四季の植物 | 浅草祭 | 四季食彩考 | 淀川の春 | ひこうき雲 | 幻の城 | 故郷の秋 | 花南瓜 | 潮騒 | 沢音 | 社 | 七十二候 | 初燕 |
| 阿久津勝利 | 高野松風 | 久保田富士子 | 為永香月枝 | 永田公香 | 中嶋久登 | 山田季聰 | 入山繁幸 | 鈴木美由紀 | 山本瑤子 | 恒川清爾 | 奥太雅 | 本多ひとみ | 長谷川洋子 | 松永博子 | 曾根満 | 齋藤信 |
| | | | 3 | | 6 | | 4 | | | | 9 | | 1 | | | |
| | | | | | | | 2 | | | 3 | | | | | | |
| 1 | | 2 | | | | 6 | | 4 | | | | | | | | |
| | | | 1 | | | | | 3 | | | | 6 | | | | 2 |
| | 1 | | | | | | | | 4 | | | | 10 | 2 | | 3 |
| | | | | | | | | 1 | | 4 | | | | | 8 | |
| | | | | | | | | | | | | | 1 | 3 | | 7 |
| | | | | | | | | | | | | 2 | | 4 | | 3 |
| | | | | 2 | | | | | 4 | | | 1 | | 3 | 6 | |
| | | | 2 | | | | | | | 1 | | | | | | |
| 1 | 1 | 2 | 4 | 4 | 6 | 6 | 6 | 8 | 8 | 8 | 9 | 9 | 12 | 12 | 14 | 15 |

無得点は省略

作品としての意識を

小林 愛子

以前にもお願いしたが、連作であるからには一貫したテーマが欲しい。一句としてはよいが作者の意図がわからない上、めりはりに欠けるのは惜しいことだ。また俳句は説明、述べるものではなく、映像を結ぶもの、というのをお忘れなく。

私の頂いた1位は福島吉美さんの「台湾の旅」。かの地でも平常心で自分の言葉で詠み、前半が佳い、季語に注意を。

旅に買う少し派手めの夏帽子
台湾に残る鳥居や仏桑華
原色のあふるる町に水を打つ

2位には大内マキ子さんの「襟裳岬」。北海道の雄大な風光が魅力である。今後は別なアングルで見せてほしい。

蹄鉄の火の赫赫と牧の夏
牛群れて行き所なき大暑かな

3位は伊藤美音子さんの「空の不思議」。佳句が多かった。冒頭の誤字と弛んだ句が無ければこれが1位と思った。

断層の波打つ縞や鴟高音
梵鐘の一打に釣瓶落しかな
篋の葉ずれに冬の来たりけり

連作としての魅力

中村千久

今回は会員からの作品が多く見られたことを嬉しく思いました。選に当たっては、一つひとつの俳句の完成度はもちろんですが、ただ20句を並べただけではない、連作としての魅力が感じられる作品に注目しました。選をしながら、題名の付け方も大切な要素であることも教えられました。

結果として、福島吉美さんの「台湾の旅」を1位に推すこととなりました。恐らく倍以上の旅吟を作られたのではと思います。その中から強く印象に残った20句が、楽しい作品にまとめられており、読み進むうちにいつしか台湾旅行を楽しんでる自分に気づきました。

スパイスの香り吐きだす扇風機

原色のあふるる町に水を打つ

植木市銭の成る木に金の札せん

2位には三木豊子さんの「花石榴」。新中央句会にも意欲的に参加している作者です。身辺にある夏の情景、様様な写生の目の行き届いた日常詠が読み手を楽しませました。

和菓子屋に時計が鳴つて花石榴

青竹の箸ながながと夏料理

3位は伊東文恵さんの「茶摘」。茶どころ静岡からの、現

場を知る作者だからこそ詠み得た作品でした。

農小屋に飴色放つ茶摘籠

深爪の疼く八十八夜寒

素直な写生

福島せいぎ

1位「沢音」長谷川洋子さん。

ご自身の生活の周辺から生まれたものか。静かな山村の晩春から初夏の景がていねいに描写されている。全体に良くまとまっていて、真面目に対象と向き合っている。

峠路の木々を縫ひゆく黒揚羽

満天星の花の小鈴へ峡の晴

谷川の高みに藤の幾重にも

2位「茶摘」伊東文恵さん。

茶摘というテーマに沿っていて、20句すべてに茶の香りがする。茶摘の作業を熟知していなければ生まれません。緑さす茶どころ富士を背ナに置き

茶問屋の金賞の板春日濃し

母に先づ白磁に注ぐ新茶かな

3位「台湾の旅」福島吉美さん。

旅吟の場合、地名やその国ならではの風物が大きなウエイ

トを占める。徹底した写生に台湾らしさが描かれている。

安産の女神に供ふ青バナナ
台湾に残る鳥居や仏桑華

自分の言葉で動かぬ一句を

前田貴美子

「鳥」杉澤修さん。四季折折の鳥たちを、自然の中に遊ばせる。大景小景の舞台に、鳥達は啼き弾みそして羽搏く。

鳶の輪の交はるところ風光る
谷空へ慈悲心鳥の声頻り
磯鴨や夕陽褪せゆく海の紺
甲斐駒ヶ岳に一片の雲鷹渡る
日輪の揺らぐ川面を番鳩

「五月の牡丹郷」辺野喜宝来さん。牡丹社事件の地を訪ねた台湾の旅である。觀光俳句に陥らず、事件や行事を説明報告するに終わることなく、その地に立つ自身の実感で詠む。

樹々は濃く淡く五月の牡丹郷
万緑の風音に人集ひたる
平和込め壺に挿す白百合の白
史蹟碑に記憶すべてや夏野ゆく
芭樂芒果蓮霧白磁の大皿に

「七十二候」曾根満さん。想像の世界や実感に乏しい七十二候に挑戦した意欲を買った。筆者の選考メモには、言葉や調べが窮屈。シンプルに自身に引きつけて……。とある。季語として自然の中に置くか心象としてとらえるか。

魚氷を上る農人鍬を研ぐ朝
黒雲の遠嶺に湧くや玄鳥去る
開拓や雪の下りて麦出びる
款冬の華さくや切岸灯すやう

「空の不思議」伊藤美音子さん。

夜の色にまぎれはじめし桐の花
等、静かな詠みぶりに惹かれた。三位と迷った。

難しかった順位

榎本文代

応募作品からは20句を纏める努力と熱意が感じられた。その中から10編の選をして、順位をつけるのは難しかった。

1位「花石榴」三木豊子さん
梔子の白きに白さ重ねたる
和菓子屋に時計が鳴って花石榴
辣韭洗ふ白き光を笊に上げ
身辺を詠んで、やわらかく穏やかな表現が良い。平凡な句

もあつたが、作品から伝わってくる感情は素朴であたたかい。

2位 「迎土の桜」松田好子さん

田の神を送る畦みち露のたう

潮の香の桜吹雪に電車待つ

元日の大地震から少しずつ動き始めている復興の兆し。風土色をもつて詠まれた。

3位 「雲の峰」丸本祥夫さん

掴まずに横へ払へと鮎取

鉄棒にお下げ逆さま雲の峰

固有名詞が多く、荒削りな句も見られたが、作者独自の感覚が面白かった。

俳句の基本を大切に

神田美穂子

今年40編の応募があり、昨年より多く、応募された皆さんの熱意と努力に対して敬意を表します。毎回選をするにあたり、俳句の基本を踏まえつつ、平明な言葉で詠んでいるかをまず念頭に置いている。

1位 「鳥」杉澤修さん。テーマを「鳥」に絞り20句に纏めたところに好感が持てた。真正面から取り組んだ句が揃っ

ていて作者の人柄や作句姿勢が見えてきた。これからの課題は単なる写生を超えた句や、少し力を抜いた句も。

鳶の輪の交はるところ風光る

磯鴨や夕陽褪せゆく海の紺

2位 「空の不思議」伊藤美音子さん。日常生活から詩を抄い上げて、ただごと俳句にならぬよう取り組まれたと感じることが出来た。ただ残念なことに一句目に誤字があり、1位にすることは躊躇われた。くれぐれも誤字、脱字、文法、歴史的仮名遣いには気をつけたいものである。

遠汽笛尾を引いてある夕月夜

梵鐘の一打に釣瓶落しかな

3位 「隠沼」中鉢弘一さん。手堅い写生の20句に安心して読むことが出来た。

蒼天にこぼるるほどの初音かな

楽しんで自分らしさのある俳句を

林陽子

1位 「義仲探訪」成瀬真紀子さん。季語が活かされていて迫力のある句が多く、テーマ性のある20句は、物語として興味をそえられる作品でした。

一面の夏野越後の国府跡

空堀を埋め 夏草猛々し
風重し 県境跨ぐ 二重虹

2位「鳥」杉澤修さん。一年を通して鳥に焦点をあて、じっくりと観察、写生した句の多くに魅力を感じました。生き生きと表現された鳥の20句に繋がりが欲しかった。

鶯の輪の交はるところ 風光る
地を掠め 風を自在に 夏燕
谷渡る 風の尖りを 冬の 鶇

3位「空の不思議」伊藤美音子さん。「万象俳句賞」の受賞、おめでとうございます。先ずタイトルに興味津津。自分の五感を信じ、対象と真摯に向き合い生まれた作品群に心惹かれるものがあり、20句を読み終えてタイトルに納得。

夜の 色にまぎれはじめし 桐の花
河骨の 黄花水よりくる 暮色
碧と言ふ 空の 不思議や 寒の 晴

選後感

一句ごとの評価に、20句としてのテーマ性、構成、仕上がりに、題名の訴求力等の評価を反映させて順位を決めた。

三屋 英 俊

1位「隠沼」中鉢弘一さん。作者の感性とそれを表現する力量を感じた。景と季語が多彩に展開し読後清涼感が残った。三尺の身の丈 残し 蛇の衣
で 虫の 遠出や 一葉の 裏表

2位「辺土の桜」松田好子さん。大地震を挟む能登の一年間の風物が、20句を通して生き生きと伝わって来る。作者の郷土愛と、そこに生きる前向きな思いが感じられる。

鈍色の海や 垣垣の 虎落笛

3位「春から夏へ」岡本敬子さん。故郷の自然に目を据え、季節の移ろいを素直に描写。全体としての流れもスムーズ。お日さまとどのたんぼも 交信ちゅう
作者の童心が垣間見えていい。二十句途中の 一服的な一味。

4位「出雲路」小池清晴さん。題名に訴求力がある。出雲路を一緒に旅しているような楽しい気分にさせて頂いた。

亀鳴くや 意宇と呼ばれし 国府跡

5位「五月の牡丹郷」辺野喜宝来さん。季語感の異なる台湾で「牡丹社事件」に思いを致し、心を込めて詠まれている。

産土の 戦事 遙かや 朝螢

「万象俳句賞」応募作品の一句

(江見悦子主宰選)

応募者40名の内、受賞者を除く36名の作品から、各一句を紹介し、ここに敬意を表します。(応募順)

| | |
|-----------------|-------|
| 蟬鳴くや遮光器土偶の目が光る | 竹澤竹里 |
| 花の昼艇庫より艇担がれて | 入山繁幸 |
| 親戚のあれこれそれと盆用意 | 入河大 |
| 岳樺北の大地の芽吹きかな | 村田由美子 |
| 入学見ただいまの靴跳ね返る | 下嶽孝一 |
| トンネルへ駆け込む少女春の雷 | 桔梗純 |
| 風靡く椰子の木蔭の三尺寝 | 田中秀幸 |
| 若鮎の骨切りなます苔香る | 山田季聰 |
| 降りしきる雨の中なる額の花 | 鶴尾正江 |
| 薔薇が好き家業一筋通しけり | 松浦陵保 |
| 表札の姓皆同じ鶏頭花 | 恒川清爾 |
| 春浅し州の水底の日のゆらぎ | 高野松風 |
| 黒揚羽月見櫓の森に消ゆ | 山本瑤子 |
| 弁天へ合掌の手に蚊の名残 | 松永博子 |
| フリーターばら一本のプロポーズ | 阿久津勝利 |
| 人住まぬ柚の屋敷の乱れ萩 | 永田公香 |

| | |
|----------------------------------|--------|
| 鳶鳴くや芥の寄する秋の浜 | 本多ひとみ |
| 街の灯を映す宍道湖水臙 | 小池清晴 |
| 灯籠を尺取虫のひと回り | 長谷川洋子 |
| 雷や八方睨みの龍の絵図 | 丸本祥夫 |
| 史蹟碑に記憶すべてや夏野ゆく | 辺野喜宝来 |
| 日の光流し流して大河夏 | 岡本敬子 |
| 万緑や底に倶利伽羅地獄谷 | 成瀬真紀子 |
| 先輩に二枝切りて額の花 | 杉田富美代 |
| ひと筆のひこうき雲へ鳥渡る | 鈴木美由紀 |
| 真つ新たな保母のエプロン初燕 | 齋藤信 |
| 湿原の瀬音集めて沼の夏 | 中鉢弘一 |
| 蹄鉄の火の赫々と牧の夏 | 大内マキ子 |
| スパイスの香り吐きだす扇風機 | 福島吉美 |
| すれ違ふ黒衣の聖女コロンの香 | 為永香月枝 |
| 寒蟬 <small>ひぐし</small> 鳴く雨の去りたる村社 | 曾根満 |
| ピカチユウの傘でびよんびよん梅雨の入り | 久保田富士子 |
| 和菓子屋に時計が鳴つて花石榴 | 三木豊子 |
| 手作りの脚立ぐらぐら袋掛 | 奥太雅 |
| 点滅の赤信号や山車曲る | 中嶋久登 |
| 野火果ててただ深々と暗夜かな | 山口孝治 |

※作品については応募作品をそのまま掲載しました。(編集部)

生まれてから、数えてみると20回引越し、そのうち3回が長崎です。90歳の母と住むためです。以来17年、引越しの度に町名の由来に面白さを感じてついつい調べてみました。

現在長崎市には名前が変わったのを除き四七四町がありません。そのほとんどが元は川、海の埋立地です。

1571年に六町から始まりました。

その六町は、平戸町―平戸藩の管理地。大村町―大村藩の管理地。島原町―島原藩の管理地。横瀬浦町―大村藩の前の貿易港の名。外浦町―大村藩の港名。文知町―大村藩の埋立地の分割地。今、市電が走っている所は、ほぼ埋立地です。ですから海抜1メートルがほとんどです。

出島町―阿蘭陀商館の築島エリア。新地町―貿易品用の蔵の新理立地。銅座町―銅銭の铸造場所。館内町―日本唯一の唐人屋敷で館内は囲まれていた。宮摺町―切支丹に破壊された神社を「宮修理」、が訛った。古町―岬にある観音禅寺への古参道。十人町―岬の遠見番十人の官舎があった。今博多町―本博多町の遊女屋が引越して来た。「本」と「今」がつく町名が随所にあるようだ。古町―寄合町と呼ばれ古くから遊女屋があった所、遊女屋が丸山町へ移転した後、古町と言われるようになった。長崎でも古い地域。

平戸小屋町―唐通詞の別荘を平戸藩の陣屋へ献上。御船蔵町―筑前藩の船蔵があった。夫婦川町―二つの湧水を雌雄水

と呼ぶのが変化した。松が枝町―大きな松の枝が海に刺さるように枝垂れていた事から。榎山町―多くの切支丹の潜伏地。三度、岩屋山に登り榎山の方を拜むと、ローマにお参りした事になったとか。

寺町―数えると14の寺が寺町通りに立ち並んでいる。諏訪町―長崎の氏神の諏訪神社は現在西山に移転。町名だけ残るが、おくんちの奉納踊りは白龍も登場の龍踊です。

恵美須町―海の守護である恵比寿様が祀られていた。坂本―老中松平伊豆守がこの地を通った際、比叡山の坂本に似ていた事から。

芒塚町―向井去来が京へ戻る際、西の箱根と言われた日見峠で詠んだ句（君が手もまじるなるべし花薄）に由来。

万才町―元、島原町が改名。明治5年明治天皇が行幸された。矢の平―開港以前の支配者の長崎氏の武術練習場があったため。

鳴滝―長崎奉行の牛込忠左衛門が京都洛北の鳴滝にちなみ命名。今も巨岩に「鳴滝」の文字が見える。シーボルトの私塾「鳴滝塾」があった。

塩浜町―三菱病院の一带には小規模の塩田があった。金堀町―現在の女の都辺りで金の採掘があった。

約500年の歴史ある街。調べていると、驚かされることばかりでした。

子規の俳句鑑賞（六）

林 徹

つり鐘の蒂へたのところが渋かりき

明治三十年作。「つりがねといふ柿をもらひて」と前書して、

柿熟す愚庵に猿も弟子もなし
稍や渋き仏の柿をもらひけり
御仏に供へあまりの柿十五

などとともに作られた一句である。

この句について書くには、これら一連の句にまつわる経緯を記さねばならぬ。それを簡記すると、この年の秋、京都から帰って来た桂湖村が、愚庵和尚の庭になった「つりがね」という名の柿と松茸を、子規の病床にもたらした。

子規はその日の日記に、「愚庵の柿のつりがねといへるをもらひて」と前書して、柿の句を記したが、取り紛れて愚庵に礼状を書くのが遅れた。子規が礼状を書いたのは十数日も経ってからのことである。

その翌日、湖村が愚庵の端書を持って子規を訪ねて来た。端書には歌が六首書かれてあり、うち一首は次のごとき歌であった。

正岡はまさきくであるか

柿の实のあまきともいはずしぶきともいはず

子規は追いかけて、また愚庵に手紙を書き、

柿の实のあまきもありぬ柿の实のしぶきもありぬ

しぶきぞうまき

ほか六首を書き添えた。

あなたから頂いた柿には甘いのもあり、渋いのもあったが、渋いのがうまかつたと言っているのである。

さて掲出句であるが、「蒂のところが渋かりき」と写生することによって、この柿の特徴を捉えている。全体としては甘いのだが、蒂のあたりに渋味がある、というのである。それを指摘することで、頂いた柿にケチをつけているのでは決してなく、むしろ褒めていいる。それは前記した短歌があるから言うのではなく、この句全体が持つひびきからそのように結論することができるのである。子規の俳句に通じてみられる闊達かたうな調べと言ったらいいかも知れぬ。長塚節から栗をもらった時詠んだ歌には、

下総のたかしはよき子これの子は

虫喰栗をあれにくれし子

とあるが、これも同じことで、虫喰栗と正直に言いながら、くれた相手をほめたたえている。子規は嫌味ということを徹底して嫌ったが、この人は本当に嫌味のない人であったと思う。

（次号につづく）

「子規・写生―没後百年―」（沢木欣一編 角川書店）より抄出

受領と娘たち

― 国風文化に一役 ―

内海良太

平安時代400年を前期、中期、後期の3つの時期に分けてみますと、そのうち中期が、最も平安時代らしい華やかさがあつた時代です。いわゆる摂関政治の優雅な時代で文学的にも隆盛を極めました。この貴族文化が栄えた源となる財源は朝廷の広大な荘園経営の収入にありました。

この荘園経営の地方治世の任に当たつたのが中央から地方に赴任した国守たちです。この国守たちは四位、五位の位階の中級貴族たちで、住民支配、租税の徴収などで朝廷や都の経済を支えていたといつてもいいと思います。

国守は官給の手当の他に、地方赴任中の役得で莫大な富を得られましたので、都の中級貴族の多くは、収入の多い国守としての地方への赴任を希望しました。国守は「受領」ともいわれ、任期は原則として4年でした。

律令制に基づいて設置された任国は全国で68カ国しかありませんので、国守への任官は非常に高い競争率でした。

赴任希望者は上申書を提出し、天皇の前での公卿会議で任官の決定がなされます。これを「除目」といいますが年一回春に実施されました。この除目の様子が「枕草子」二十三段「すさまじきもの」に書かれています。

「受領」は「広辞苑」に「ジュリョウ・ズロウとも。前任者から事務の引継ぎを受ける意。諸国の長官。任国に行つて実地に政務をとる国司の最上席のもの。通例は守（かみ）、時には権守（ごんのかみ）・介（すけ）などの場合もある」とあります。

女流文学の作者の夫、父親たちも受領層が多くいて、彼女たちも地方の赴任地に同道しています。

赤染衛門 夫 大江匡衡大隅守 鹿兒島に同道

清少納言 父 清原元輔周防守 周防に4年間同道

紫式部 父 藤原為時越前守 越前、武生に同道

菅原孝標の娘 父 菅原孝標上総守 上総に4年間同道

このように王朝女房文学の書き手たちは受領クラスの出身者が多く、それに加え、みな教養豊かな家庭環境にあり、そして宮仕への経験を持つ、という共通点がありました。

彼女たちは宮仕えを通して通常では知り得ない天皇家や摂関家などのハイクラスな暮らし向きを知ることができ、一方では生活体験をおして地方の様子を知り得たのでした。

「国風文化」は、この時代に開花したといわれています。

それは「平安中期から後期にかけて栄えた、優雅な貴族文化。遣唐使の廃止によって唐文化の影響が弱まると、仮名文字・女流文学・大和絵・寝殿造り・浄土芸術などとして開花した」と説明されています。これには受領層の娘たちが一役も二役も買っていたことがわかります。

中山純子忌に寄せて（没後十年）

衣鉢を継ぐ

江見悦子

北陸に長い梅雨が明けた丁度その日、中山純子先生の忌日記念句会に参加した。今年で10回を数える行事である。

先生が亡くなられた平成26年の夏、私はジェットコースターに乗ったような目まぐるしさの中にいた。胃痛と宣告され、切開手術を待たねばならぬ不安、「万象賞」受賞という思いもよらない喜び、そんな中で純子先生の訃報に接したのだった。大会等でお目にかかる先生は、いつも嫺やかでやさしい風をまといながら、内に強靱なものを秘めている加賀の女性俳人、と憧れの存在だった。

「万象」誌掲載の純子忌の記事で、平成30年の第17回大会に座談会を実施したことは記憶に新しい。パネリストに井村和子さん、中條睦子さんを迎え、江見が司会を務めた「中山純子句集くすばらしき出会い」である。時折加賀弁を交えながら、先生の句の背景を語って頂いた楽しい時間だった。

8月1日、西光寺の純子句碑（菊焚いて西方浄土漠とあり）の辺の菩提樹は大木となって茂り、葉陰の若い実を仰ぐことが出来た。本堂では石川支部の皆さんと共に献句を捧げ、

その後の句会では個性豊かな句に触れて嬉しかった。

帰途、「衣鉢を継ぐ」という言葉がしきりに胸に浮かんできた。欣一、綾子、純子と、石川支部に根付いた「風」から「万象」への流れが、益益勢いを増すよう、心から願ってやまない。

細見綾子の系譜にある純子 内海良太

令和6年10月号は中山純子忌の特集というので、久しぶりに本棚の中山純子第一句集『茜』を開いてみた。

『茜』の刊行は昭和34年2月1日、今から65年前になる。純子が俳句を作り始めた昭和24年から昭和33年までの作品310句が収録されている。

細見綾子は序文で「中山さんは『風』に入って俳句を知り、『風』が育つことによって、育った作家で、いはば、『風』の娘のやうな存在であります」と、広く知られる言葉。

沢木先生ご一家は昭和22年から昭和31年3月まで金沢に住まわれたので、句の作成時期を同じにし、「風」を手伝いに、沢木宅で多くの時間を綾子と共にしている。

純子は句集のあとがきで「細見綾子氏に心酔した」といっている。この細見綾子への心酔は終生続いた。

巻頭の（雉子若し春の彼岸をかきわけて）（昭和24年）は処女作として余りにも有名、句の評価も定まっている。

純子先生と話す機会は多く持てたが、話はいつも細見綾子先生のことと終始した。昭和28年、丹波の綾子生家で一週間過ごされた思い出話は何度も何度も聞かされた。

若き日の中山純子は身体的にも、身辺の出来事も、句材の把握や作品にも細見綾子に類似して、純子は細見綾子の系譜に影のように存在していると思った。これは今も変わらない。

中山純子忌に寄せて 「万象」石川県支部

井村和子

敬愛する純子先生との出会いは40代の春、中日文化センターの俳句講座に参加した初日のこと、それ以降膝下になつて俳句を学び詩情を紡ぐ事の出来た幸せな歳月が流れた。ある日「井村様に」と優しい言葉を添えて自註純子句集を頂いた。

「他愛ない句であるが月は春夏秋冬わが放心の場所、女神である」と自註を添えた集中の一句「へわが干支のうさぎや春の月まろき」に心惹かれ「私もうさぎ」と呟いたとき、「年の離れた妹ね」と優しく励まして下さった声が身に沁みた。

純子先生が逝かれ早も10年、生前にご自分の墓碑を緑の美しい広大な富士霊園に調えられていた。先年、中條さんと二人、同人総会の折、富士霊園に訪れる事が叶った。美しい墓碑に手を添えて在りし日を偲び師の面影に心を寄せた。

谷渡末枝

和服姿で欄干に手をかけ、川面を見入るポーズに、加賀女のしっとりとした佇まいが漂う中山純子先生の写真。場所は金沢市浅野川に掛かる梅の橋と思う。毎年ご命日にこの写真を遺影とし、「万象」石川支部の全員による献句と忌日句会をして、もう10年になる。

「風」創刊の間もないころから、沢木欣一、細見綾子両師の下で瑞瑞しく開花し、「風」の娘と言われ、天与の資質は戦後の女流俳人と讃えられた中山純子先生。「風」終刊後いち早く「万象」の誕生に大きく尽力されたことは、歴代主宰が敬意をもって述べられています。「風」の娘から「万象」の母へ。純子先生の遺影に語りかけ、改めてその存在の大きさを思い出している。

伊藤美音子

白菊句会では、コーヒータイムのひとつときがあり、純子先生は洋菓子がお好きで、ことにケーキを好まれ手作りを喜ばれた。句会の前日、中條さんのお宅で季節の果物をあしらったショートケーキやジェリーを三人で作らせていただいた事が思い出されます。

高田たみ子

先生とお別れしたのはついこの間のよう思われます。思

い出のひとつに、ある時の「白菊句会」でのこと。「たみさん、コップにお水を持ってきてもらえませんか」とおっしゃったので、緊張しながらも先生にお水を差し上げた。誰にでも優しく、気取りのないお言葉に先生との距離がぐんと近くなり、とても懐かしく心に残るひと時でした。

松井佐枝子

白菊句会の作品集を純子先生のお宅へ届けるTさんと同行した時のこと。外で待っていると「中に入りなさい」とお声がかかった。その時「七月の句会は私の家でしましょう。皆で来るのですよ」と言われた。「先生握手を」と連れが言い、私も手を差し出した。柔らかい手であった。まもなく先生は再入院となりご自宅での句会は叶わなかった。

石川純子

先生とは「白菊句会」でご縁に恵まれました。先生は張りのあるお声で時にユーモアも交えて話された。皆の緊張も解かれ和やかな句会でした。また、西光寺での先生の句碑開きの際、白地の薄物のお着物姿は気品があり、馥郁とした花のように忘れられません。思い出は走馬灯のように尽きず、御恩に感謝です。

道場啓子

全く俳句に縁のなかった私が、純子先生ご指導の「白菊句会」に入れていただいたのは、平成8年3月のこと。数年後に「風」の大会に参加した折、ステージに凛と立たれた純子先生のお姿に仰天、この様な立派な先生に間近に接していただけの有難さを改めて噛みしめたものです。

南 恵子

母と私は別別の句会でしたが、中山純子先生には親子共にご指導頂きました。晩年の母は「白菊句会」を楽しみにしておりました。母は純子先生への憧れが強く、飾らない話し方など大好きでした。「白菊句会」の新年会の席上で母は突然倒れ、数時間後には旅立ってしまいました。その節は純子先生や句会の皆様に大変お世話になりました。純子先生、楽しいご指導を有難うございました。

過ぎし日のしんかんとあり麦藁帽

掲句は先生の五句集から三百句を精選された「中山純子句集」にある一句です。過ぎ去った歲月や忘れ得ぬ人に対し、万感を秘めた思いの深さに胸を打たれました。先生にお教え頂いた貴重な日を追想し、心の糧にしています。

(塩井志津)

草餅のよもぎが言へり老けるなど

先生は草餅を手にして色の美しさを思わず、「老けるなよ」と言われたように思われた。蓬は大きくなれば硬くなるし若芽が一番おいしく香りも良い。昔、金沢では蓬を摘み団子を手作りしたものだ。先生の豊かな感性に感心した。

(今越みち子)

鳩に豆ことばが育つ小六月

鳩が声高に豆を啄む仕草に、傍にいた幼児が自然に言葉を次に発して行くのを見て「ことばが育つ」という中七が生まれた。純子師の感性である。「小六月」という季語がこの句を一層引き立たせ詩情が生まれた。

(豊田高子)

噴水の天辺つねに鮮らしき

句集「水鏡」の一句。じつと噴水を見ていて、天辺が常に鮮らしいことにはっと気付いた。「鮮らしき」と言い切ったところに発見の喜びを感じる。漢字の「鮮」を使い、より生氣に満ちている。一字の大切さを教えられた。(成瀬真紀子)

あかときの山にまがねの雉子の声

金沢はまだ豊かな自然が残っていて、春になると雉子が

人里まで来る。「あかときの山」はお住いの裏の山であろう。夜明けに短く硬質な雉子の鳴き声を聞かれ、その声を「まがね」と具象された。句に大変迫力を感じる。(河野尚子)

別々にもどり秋刀魚の一つ灯に

出かけていた家族がそれぞれに帰宅して夕餉の卓に着き、秋刀魚のお菜が用意されている。秋の日の家族のひとこまだが「秋刀魚の一つ灯に」がこの句の眼目で、平凡な暮しにある幸福感が窺えて、心あたたまる好きな句の一つだ。(河原昭子)

日日草たつきといふは平凡に

句集「晚晴」所収。日日草は5〜10月頃まで日日咲き続ける小さな花。正に平凡なたつきを象徴している。句集のあとがきに「晚晴は夕方に晴れるの意。老いに向かつてのこれからの日が切に安寧でありたいとねがっている」とある。(松下信子)

鳩に豆ことばが育つ小六月

未だ言葉を知らないはずの胎児のころ、乳児のころも、周りの言葉に耳を傾けていたのだろう。それがあつ日、豆を撒くように言葉を発するようになる。「ことばが育つ」と表現され鳩豆の取り合わせも、「小六月」と響き合っている。(杉本年虹)

珠洲の海満潮に春開くるなり

「俳誌『風港』創刊を祝い」とある。掲句より純子師の「風港」創刊の喜びを感じ取ることができます。純子師と故千田一路名誉主宰が共に珠洲から発信された「風港」は、能登半島地震のため二十周年を以て終刊となり残念です。

(北川禮子)

中條睦子

中山純子師は、平成26年7月28日に亡くなられ今年で10年になる。

毎年師の忌日に集い、中山純子忌を勤めてきた。初めの頃は夫君の木村久吉氏も参列し、チェロ奏者の演奏でしめやかに行った年もあった。また、「万象同人会幹事会」を金沢に開いた折、翌日は全員「中山純子忌」に参加していただいた。江見主宰には三度の来臨をいただいた。月日と共に参加するメンバーも齢を重ね、今後続けることが困難になってきた。10年という節目を機会にこれで幕を閉じたいと思うようになった。山内には「菊焚いて西方浄土漠とあり」の句碑がある。西光寺での「白菊句会」にお越しの際、必ず句碑の前に佇まれた師の凜としたお姿が思い出される。

今後は、「万象」に「中山純子記念俳句賞」もあることなので、純子忌を記念して、忌日近くに「水鏡句会」として残してゆきたいと思っている。多くの方の参加を願っています。



西光寺本堂 中央に遺影



売りに行く古ブランデー夏の月

〔砂時計〕 173

「断捨離」という言葉が世の中に認知され始めて久しい。今や食器、衣類、家具は勿論、あらゆる物がリサイクル業者や買取業者により取引されている。最近では高級なウイスキー、ワイン、シャンパン、焼酎、日本酒等もその対象である。

さて売りに行ったのは、古ブランデーとあるので、レミーマルタン、ヘネシー、カミュ、ロマネコンテ、バカラ等、容れ物の瓶も洒落たそれに違いない。以前から家のサイドボードに長い間眠っていたそれを、思い切つて売る決断をしたのでしよう。昼の暑さが少し和らぎ、外に出ると夏の月が涼しげに頭上にあつた。予想以上の値段で手放せた解放感か、すっきりとした気分であ路を急いだ作者。作者の思いを表すには、冬の月、春の月、秋の月でもなく「夏の月」であつたに違いない。

この句から見えてくるのは夏の月と上等なブランデー。それゆえ読み手は自由に鑑賞を楽しめる。そのブランデーを求めた時のこと、そしてそれからの歳月、なぜこのブランデーを手放す決断に至つたのかなど……。

句集「砂時計」には国内外を精力的に旅され、果敢に海外詠に挑戦され、多くの句を残されている。しかし、掲句のようなささやかな日常からの佳句に、生活者としての一面が濃く出ていることも見逃せない。

(神田美穂子)

くちなはの波うねり行く長さかな

〔砂時計〕 174

この鑑賞文の執筆依頼を受け、直ぐに短冊に認めた。居間に掛け、この御句がいつでも目に入るようにした。私は生来、蛇が嫌い、苦手なのだ。俳句に関わる者として、万物に心を寄せないのは不謹慎と知りながらも、身を潜める思いできた。故に、私には蛇の句はほとんどない。

折も折、「万象」令和6年1月号に、福島せいぎ顧問が、「大の蛇嫌い、細切れを見てもびくつとする……」と書かれたのを拝読し、蛇嫌いは私だけではないと安堵した。

結婚してから農村地区に住み、敷地の隅には小さな堰のある清流が流れ、蛇は陸に川に見てきた。しかし、見かける数は年年減ってきたように思う。

江見主宰の「くちなはの波うねり行く」は眼前で捉えた写生であるが、下五の「長さかな」により、水中のくちなわに詩を見出し、読者に詩情を促し、その先を追いと示唆しているのではと感じた。くちなわと水と流れと波だけの句は多く見るが、「長さかな」が心の奥の感じやすい情を動かしてくれた。「万象」の俳句を学ぶべし! という主宰からのお言葉として、短冊はこれから先もここに掛けておくことにした。

(増田幸子)



反省と願望

加須 茂木弘子

今年もはや半年が過ぎた。年明けの能登半島地震は衝撃だった。その後も事件、事故、異常気象による災害等、穏やかならぬニュースばかりの前半だった。この先は平穏無事な世であることを願っている。

さて、残る半年自分はどう過ごすか、今まで各週、各月の予定や行事などを、漠然とこなしたり、見送ってしまったりした事などと、今後は一件一件緊張感を持って向き合って行きたい。

ゆえに、来年のカレンダーは絵や、風景写真入り等の他、日捲りに多い名言・格言・慣用句等が掲載されているものを選びたい。楽天家の私は触発さ

れないと、また呑気な日日を過ごしそうでぜひ参考にしたい。「月の満ち欠け絵本」の大枝史郎氏によると「日を数えることは希望である」とか。そうだ、これで行こう!!

尾瀬のカレンダー

敦賀 川口和代

「夏が来れば思い出す。はるかな尾瀬遠い空」のメロディを聞くたびに、仲間と行った尾瀬を思い出します。

その尾瀬の風景を毎年カレンダーにしてくれる友達がいいます。コロナ禍の時、尾瀬行きを断念した時も、このカレンダーを見ては心がやすらぎました。綿菅や風吹き渡る尾瀬を歩く各地の仲間10人余り鳩待峠へ集合、尾瀬ヶ原トレッキングの始まりです。

尾瀬沼へ逆さ燧や涼新た燧ヶ岳遙かにもゆる草紅葉長蔵小屋で山の澄んだ水でのコーヒーを飲み尾瀬ヶ原の話が溢れます。

尾瀬の思い出を描いたカレンダー、見る度にまた来年も素敵なおカレンダー

が届くのが楽しみです。

カレンダー

大阪 入山繁幸

カレンダーの語源は「叫ぶ」「宣言する」。古代ローマ暦の朔日(新月)の日に司祭長が市民を集めてその月の祝日や忌む日、行事の日程などを布告した。またその日は貸し借りの清算の日でもあったと言う。集められた市民は自分たちの暮しに関する事柄をメモ書きにでもしたのであろうか。

百濟から伝わった日本の暦、具注暦もまた同様に季節や年中行事、毎日の吉凶などを表した。貸借の清算などは定かではないが、こよみ(日読み)と呼ばれるように、日を持って晦日に売掛金の回収などの暮しぶりがあっただろうことは想像に難くない。

暦を廃棄する時、メモ書きにその時を思い返すことは誰にもあるようだ。

赤丸の印の多き古暦

滝沢伊代次

富士山のカレンダー

富士 神田美穂子

我が家には四カ所にカレンダーが掛けてある。その内一番活用しているのは、毎年富士市が全戸に無料で一部ずつ配布する富士山のカレンダー。

毎年富士市が公募する富士山百景写真コンテストの入賞作品より、それぞれの月に相応しい写真が選ばれる。今年の1月は富士山がラッピングされているトラックとその上の富士山。2月はカーブミラーに映る富士山。4月は蓮華畑と富士山の間を走るドクターイエロー。9月は茶畑越しの富士山と鯛雲。11月は富士山と流星群。12月は霜を被った茶畑と雪の富士山と、大変ユニークな力作ばかりである。

実費を払って市から買い求め、子供や親戚、友人等に、毎年そのカレンダーを送っている人もいるのだとか。



私のカレンダー

徳島 宮西修一

カレンダーと言えば、昔は銀行から貰って壁に貼る一枚カレンダー。お米屋から貰う日めくりカレンダーは、時々3、4日分を一度に破いていた記憶がある。在職中はおつばら手帳。近頃は月毎のカレンダーを使用している。

妻と二人の生活で、趣味も行動も違うため、お互いのカレンダーを確認して過ごしている。私は寝る前に日めくりの俳句カレンダーを破り、朝は相田みつをの名言集「ひとりしずか」(トイレ用)をめくる。

今朝も快便、一日が始まる。忘れずに二つのことが出来ていれば大丈夫と、自分に言い聞かせている。

カレンダーの中の故郷

柏 鹿毛満子

暮れになると、早早準備するのがカレンダーです。何かとゆっくりめの私が予定を待つ余裕を欲しいからだと思

います。今は介護のため、自分の予定より、病院などの予約の日程に追われています。自身のためにカレンダーの1ヶ月をデザインし、一週間デザインできる日を楽しみにしています。

初冬の風物詩、故郷福島県二本松市の幡祭りには、12月第一日曜日です。雪の安達太良を背に軍勢の幡に見立てた五色の幡が、法螺貝、白旗を先頭に初冬の尾根を継走する。吹きつける寒風に、ごうごうとなびきながら山嶺を進む様子は美しいものです。

すっかり話が逸れてしまいました、姉が送ってくれる幡祭りのカレンダーは大切です。カレンダーの中の故郷に私は支えられています。

「万象ノオト」投稿募集

▽2月号「図書館」(10月末日締切)

▽3月号「テレビ」(11月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

巻頭作家（九月号）プロフィール



渡辺 志ま
(燕)

まるで兄弟のように弥彦山と角田山が竝ぶ。晴れた日の角田山は薄むらさきに霞んで見えた。志まさんはその優しい姿を見て成長し、新潟医科大学の看護婦・助産婦養成所で助産婦を目指す。成績は何時もトップクラス。性格は温和、沈着冷静で健康と、何拍子も揃っているから、誰からも信頼される。「それで俳句との出会いは？」と尋ねたら、「医局で盛んだったから。それで私の俳句は聞き齧りの耳学問」と、あっさり躲されてしまった。

代代医業の旧家で産科医のご主人と結婚。志まさんもご主人と共に病院経営に携り、忙しい日々を送ることとな

る。しかし、三人の子女にも恵まれた倅せな暮しは、ご主人の急逝によって突然もぎ取られてしまった。

志まさんの心は虚ろ。何にも興味も持たず、何をしても慰めにならず、心の隙間は埋められなかった。

そんな時、即かず離れずでいた「花守句会」の俳句が志まさんを救ってくれた。それからの志まさんの句の上達は目覚ましい。「花守」巻頭二回、また「花守」の終刊誌には、志城柏先生選の73人の句の中に志まさんの5句が入れられた。

覚えなき春の泥つけ戻りけり
ひつじ草蠢くものを覆ひけり
新涼の楸深ぶかと浸し置き
夕鵬や洗濯物のよく乾き
沼垂と云ひ来し街や鱗雲

志城柏先生の跡を受け、近藤彩江、森重夫、佐藤三男さん方が「かしわ句会」として指導を引き継がれた。現在の「万象新潟句会」へは、歩けるうちは通う」と嬉しい言葉を頂いている。

志まさんは読書家の上に、働いて体を動かすのも好きで、庭の手入れから畑仕事までやっていたが、さすがに90余歳。仲良しのお嫁さんから、「もう止めて……」と願われて、畑は止めたけれど、家の周囲や庭の草を抜いたりするのは止められず、芍薬などを見事に咲かせる。「無心になれるところが良いのだ」と言っている……。

弥彦神社では、初詣から大晦日まで多くの神事・行事がある。9月号巻頭の四句に詠まれたのも、弥彦神社のお膝元。神苑の鹿園の傍の鶏舎の長啼き鶏や尾長鶏など、豊富な句材に恵まれた環境に住まう志まさんの慣れ親しんだ日常の光景である。

目つむれる小屋の神鶏薄暑かな
村人の沢を守るや螢飛ぶ
伊弥比古の水のめぐれる花あやめ
川蜻蛉樹下を現れ樹下に消ゆ

幼い頃より、共にこの地で歳を重ねて来た親友、志まさん。弥彦の神神に守られて、いつまでも弥彦の句を詠み続けていたきたい。

(高橋ひろ)

万象作品

江見悦子・内海良太共選



○は佳句に選ばれました。

薄紅のスモークツリー南吹く 東京 一由久美子

長き枝突き出る鳩の浮巢かな

○夏安居や古き櫺戸閉づる音

磨崖仏のあはき輪郭梅雨の蝶

○あかつきの木木の騒めき桜桃忌 横浜 星野信子

新樹光揺るる真珠の耳飾り

夏至の夜続きは明日へ句集閉づ

肩腰に灸の跡や梅雨の入り

切つ先のたぢろぐ赤さ初鯉 静岡 松永博子

○山法師谷照したるひとところ

宿坊の玻璃を流るる夏の雲

逍遙の漢の白き単衣かな

縄文の黴の匂へる土偶かな 敦賀 為永香月枝

○川添ひの囿看板鮎解禁

秀吉の隠し湯ひそと螢舞ふ

糸取女湯気の向うの応答 うけこたへ

路地裏に青柿二つ転げたり 東京 長谷川はるみ

向日葵を友の棺にそつと入れ

越後より粒を揃へてさくらんぼ

○うすものを緩やかに着て崩れなし

テンポ良きラジオのリズム袋掛 和 村田由美子

CDのキラキラ揺るるトマト畑

道場の面打つ声や濃紫陽花

○入梅や谷田部句集を音読す

帰らぬと幼子の泣く夏の夕 札幌 谷 廣司

○紫の風やひかりやラベンダー

沙羅落花一人拾へば又一人

八人に見送られ逝く蟬しぐれ

○小雨降るひよどり坂の濃紫陽花 横浜 坂本具子

○氷砂糖かたりと解くる梅酒瓶

紫陽花の坂を降るれば海開け

日本地図真赤に塗られ極暑来る

忘れるし十葉繁る庭の隅 札幌 石田 睦

応援の少女の声や夏旺ん

熊笹の背丈を越ゆる夏の山

手をつなぎ積丹ブルーへダイビング 雁部 真子

西表島ピーチパインの香り満つ

羊蹄山の裾野は広し夏蕨 佐々木 茂

ほうたんや潮騒遠き鯨御殿

夏の漁縞海老掬ふ打瀬舟

知床の真夜とどろかす行行子 札幌 島崎 洋

○夏座敷小津映画めく爺一人 札幌 島崎 洋

町家から漏るる三味の音星涼し

コリアンタウン異国語混る熱帯夜

○海霧深き海へ乗り出す毛蟹船 園田 鶴子

はしどいの甘き香りや夏の蝶

横道に子供神輿のひと休み

木道の果ては空へと夏野原 竹重 富子

夕まぐれ明るく白き野ばらかな

丁字路の向うは深き茂りかな

大瑠璃の声青空の奥の奥 田邊 政代

善光寺茅葺き屋根の風涼し

鳥運ぶ種より生ひしさくらんぼ 土門 一平

愛猫に噛まれて許す濃紫陽花

注文は寝冷えの朝の納豆汁

草茂る給油タンクの脚にまで 土門 一

リビングに初クーラーの作動音

おつまみは冷しトマトにバジル添へ

大西日ジョッキ片手に大通り 船橋 明美

再会の笑顔待ちたる夏休み

懐しき金魚すくひに對戦す
散歩する片手に小さき扇風機

藍の濃く水玉こぼす蝦夷紫陽花

新庄 曾野部礼子

○月の山夏霧阻む八合目

初生りの不揃ひの茄子棘粗く

半夏生錠前固き賽銭箱

仙台 富田洋子

紫陽花寺上げて下げての傘の列

○山越えの脱藩の塚蟻のほる

○野ざらしの賽銭あまた蟻の列

新潟 齋藤 信

苔青し新車祈禱の太鼓の音

振花や文字掠れたる鎮魂碑

○父の日やいつもの場所に父の椅子

青時雨廊下にたたむ車椅子

紫陽花の淡き緑や鬮り口

背越し鮎早瀬の石の香りかな

山田季聰

雲晴らす登りきつたる立葵

短夜や蛇口を垂るる水の音

板の間の黒びかりせる涼しさよ

燕 渡辺志ま

園児らは眠りるときか日の盛

保育士もこどもの横に昼寝かな

よろよろと老いの自転車青田道

芳賀 稲川清子

片白草一輪挿して玄関に

青無花果熟るるを待ちて鴉来る

緑蔭に御朱印帳を見せ合へり

○外厨の束子をつつく梅雨鴉

花手水の四葩竜吐く水もらひ

濃紫陽花車椅子より見上げたり

軽やかに流るる音や田水引く

足つかぬ児の三輪車初夏の風

小糠雨宿して垂るる濃紫陽花

伽羅落の妣よりうすき塩加減

実山椒生かすレシピを二つ三つ

朝空へなべて平らや山法師

豌豆の筋引きたればくるくると

薫風や光る銀輪土手走る

○肩の装具外し乗りたる夏至のバス

草いきれ我が家ひと月空けしまま

娘と暮す賑やかな日日風薫る

噴水に遊ぶ子供の声高し

庭に咲く螢袋や雨を待つ

齋藤ミチ子

振花や庭の芝生に点点と

浅間嶺の噴煙うすく涼み茶屋

佐野

仲山さよ子

ごつごつと走り根つづく滝の道

穴出づる蟬の濡れ色してゐたり

木の間よりゆるゆる螢近づけり

アトリエへ桂青葉の香の中を

車窓より紅花畑広れり

首稽にすべり込みたる野球帽

義本美智江

鏘深き天水桶や苔の花

潦渡りきつたる毛虫かな

志木

汐見克彦

盛んなる夏山黒さ極めたり

風鈴の風はリズムを刻みをり

黎明にほほづきの朱のほのかなる

森山洋之助

十字切り喪服の出づる炎天下

廃屋に絡む凌霄トロピカル

戦とは無縁の軍手草むしる

和光

板垣陽子

梅雨晴間色とりどりの傘並ぶ

夏空や蹴られしボール高高と

千葉

高田みや子

炎天下車の影のくつきりと

街騒の遠くにありて月見草

獻杯の黙や風鈴一つ鳴る

○帰省して廃校の門くぐりけり

あぢさゐの風ふうはりと息吐けり

酒々井

小林あけみ

鳥居まで路地の階段夏燕

朝刊を取り出すポスト青時雨

○天目指しからみからみて凌霄花

佐倉

新谷八郎

梅雨明や靴はく犬に道ゆづる

肘折温泉の湯治三日目遠郭公

放牧の石に塩撒く炎天下

有泉正夫

○微にほふ父の葉書の塵払ふ

骨拾ふ木洩れ日に舞ふ夏の蝶

竹藪の老鶯聞ゆ祈禱殿

杉田富美代

網戸して籠る熱気を逃しけり

遙かなる青田に風の波立てり

暮夕日を沼に引き込んで

鈴木隆久

目を凝し緑蔭に読む芭蕉句碑

群青の海風受けて枇杷熟るる

○一日が静かに終る沙羅の花

鈴木美根子

がき大将時には優し栗の花

独り居の老人訪へば薔薇香る

深き根を持て余したる草むしり 佐倉 立原千代子

蛇苺そば屋の卓を飾りたる

黒酢甕醸す年数夏の浜

遠来の友と語りて明易し

写経する鈴りんの余韻や夏座敷

夏めくやモネの睡蓮見てねむる

リハビリのペランダ歩き夏は来ぬ 船橋

ミサイルの心配増ゆる沖繩忌

ひまはりやロケ地は未だ戦争中

境内の暮れて風鈴残りけり 柏

万緑の杜に一札試合の日

立葵競ふことなく咲きのぼる

梅の実の落ち放題や築地塀 松戸

庭石の蛇の衣へと誘はれ

○描かれし三保の松原夏蒲団

内蔵の石の扉やつつじ咲く

○滝落つる前滝の水膨めり

再婚の家に真白き山法師

振花の一つ右巻き子等の庭

山口秀吉

米田敏子

鹿毛満子

石川幸子

菊岡緋路

寿多映子

青葉雨ダム湖は赤き橋一本

妣からのレース古びず旅の友 松戸

公園の児等の声湧く夕立かな

紫陽花の褪すれど散らぬ命かな

遠筑波水田を抜くる若葉風

青空を押し上げてゐる花菖蒲

庭園を囲む青桐日をこぼす

蓮青葉ぐうらりと揺れ水零す 市川

吾が昭和九十九年月見草

朝靄に覚めぬ岬や花木権

濁声のからすに蓮見迎へられ 東京

泥田から清らに咲ける古代蓮

知事選の応援演説梅雨の雷

渡部洋子

奥澤よし江

安藤美酒々

大場八朗

町役の袴姿祭に威

大神輿わつしよい見る人かつぐ人

神苑の木木の濃みどり白菖蒲

ゆつたりと蓮に吹かれて巡る池

バスの便途絶えて久し月見草

梅雨に入るトレイに選ぶ焼きたてパン

高野翠子

北口富栄

北口富栄

北口富栄

北口富栄

北口富栄

北口富栄

北口富栄

北口富栄

父の吹く草笛に子の泣きやみて
喉をやく濃きミルクティ梅雨入かな
万緑の中すいすいと一輪車

東京 鶴田智美

炎昼やうつらうつらと眠気来る
今日もまた冷麦すする昼の膳

中澤桃子

星涼し高原の夜森閑と
忙しくも添ふる一品胡瓜もみ
手習ひの筆揉みおろす夏座敷

橋本紀代子

さがり花咲いて一夜の命かな
届きたる箱いつばいの夏野菜
熱の地に列を作りて蟻の道

平子甲奈

湯気香る夫の炒めし夏野菜
麦の秋風の中なるコンバイン

ジャンプ決め猿胸を張る薄暑かな

松井宣夫

○籐椅子に残る主の背の凹み
死してなほ目に力あり蝮酒
夜濯ぎの機械の回る深夜二時

松本幸男

湧水の池に祠と水馬

○舞鶴の記憶に残る夏の海
犬と子の蹴散す飛沫梅雨晴間

少年の夏白雲の悠悠と 東京 宮崎正義

法螺響き錫杖の鳴る山開き

青田風姉さん被りの白き布

夏蝶に息づく碧や雨後の空 調布 荒井 仁

早梅雨硯の墨に瑠璃兆す

黒南風や教科書重く忘れあり

夏めくや旨きパン屋の列長し 三鷹 南場雅子

今朝もまた富士見えぬ空梅雨の入り

紫陽花の枝を切る音響きたり 府中 竹村晃子

水海月ひよいと忘るるこの現 府中 竹村晃子

虹立つや知らする間にも消え失する

青梅雨やしばらく遅れ返信し

○竜飛崎の嵐に耐ふる旅晩夏 日野 松原悦子

古バイクへくそかづらの花盛り

枇杷を挽ぐ二階に枝を引き寄せて

古き店ママの遺影と小手毬と 青梅 横井一美

○雨上る菖蒲園行きバスの列

十葉は夏の入り口白き花

○三代の着継ぐ留袖五月晴 横浜 大駒泰子

野に山に白い花花夏来る

雲間より月現るる梅雨入かな

遠き日や海ほおずきと波の音 横 浜 岡 元枝

虹立つや夕餉仕度の手を休め

夕暮のジャスミン垣で深呼吸
五月雨にブルーシートの屋根光る
ゴンドラの下にひろがる山法師 川 崎 横山ユキ子

箱庭の雨に艶めく赤い橋

ひと処崖の明し花茨 加藤和子

待ち侘びて帰国の父と螢見に

川幅の三倍に化け台風裡
リハビリの送迎車待つ下野草
五月雨や野山のみどり濃く淡く 茅ヶ崎 久保田富士子

裏庭に何時か移りし白あぢさゝ

あぢさゝの芽吹きさの早きつすみどり 柴田雅春

寒雲のたそがれどきも動かざる

○雲海や富士五合目の握り飯
○手造りの団扇廻して母恋ふる 伊勢原 鷹取瑞子

アスファルトの裂け目に生ゆる葦かな

子燕の再び育つ古き軒 長野高朋

丈合はぬ父の形見の夏衣

姫女菀窓辺に挿して独りかな
凌霄の花に手入れの狭庭かな
草苺るや肩に食ひ込むモーター音 山本カツ子

花ふぶき登校児童一列に

五月晴画板を並べ写生の児 森 桂子

寺巡り千の紫陽花千の色

○腰までの流れに撓る鮎の竿
微熱の子守れる三日や梅雨ぐもり 松 田 古谷悠紀子

立葵勢ふ路肩や海の風

花虻の小さき翅のホバリング 豊 美佐子

交番の赤色灯に燕の巢

山百合のかしぎ咲きたり崖つぶち
日日通ふ温泉児等と夏休み 松 本 藤森利子

マロニエの若葉へ雨の激しかり

カーネーション鉢にピンクの花あふれ 豊 美佐子

老二人木曾路の旅へ月朧
蟬採りの大きな網をそれぞれに

翠巒や村まで続く九十九折

静岡

飯田優子

○なめくぢり標高千の山暮し

舞殿に光る毛虫の赤まだら

大瑠璃や天地返しの男の背

父遺す箱根空木の乱れ咲き

白百合や朝の日差しに立ち上る

田植唄今は一人の機械植ゑ

紫陽花や雨滴を吸うて色増せる

でむしや大葉の裏へ跡を引く

梅花藻や砂噴き上ぐる水の音

○水源の社に御神酒田水引く

弁柄の残る石棺五月闇

夏蚕飼ひ昔を語る蠹かな

子の上を鳴き旋回の親鴉

羽化の蝶摺まる脚の薄みどり

南天の花散したり鳥の声

滝落ちて滝壺のぼる水煙

川蜻蛉標識に来て折り返す

玉砂利の音の社や風薫る

梅雨入の櫓の狭間奥暗し

夏帽の友と出会へり札の辻

伊東文恵

海野俊彦

杉田義則

高井明子

高橋一夫

田中秀幸

車窓より目の会ふ子鹿後退り

静岡

筑地裕子

青蛙逃す子そつと手を広げ

山棟蛇茶株の上に疇巻き

白靴の課外授業の子ら来る

診察の予約忘るる走り梅雨

弁当にトマト四切れの鎮座して

産土の注連に黒黴きざしけり

山門の裾に広る七変化

百筋の滝のしぶきを顔に受く

短夜を共にしたるか蚊の唸り

梅雨晴間村の広場に打球音

神木の杉の根方に苔の花

涼風や千畳閣の板に座し

○青蛙田水の底を蹴り上ぐる

経蔵を回すをんなの汗匂ふ

大枝の櫓に潜む黒揚羽

産土の檜落葉を踏みしめて

風鈴に迎へられたり極楽橋

白蓮のゆるる辺りや鯉のひれ

○阿羅漢の顔に衣に苔の花

内藤允昭

永田公香

野崎浩子

長谷川洋子

矢野喜久江

燒津 小梁洋子

梅天やチエーンソー響く檜山 掛川 鈴木美由紀

黒雲の攫つてゆける梅雨の月

草取の背を撫でたる山の風

吊橋の伝ひ歩きや河鹿鳴く 巖崎 鈴木裕一

門前の梅を拾へり熊手もて

竹の皮脱ぎ切つてをり過疎の村

遅れ来て古巢繕ふつばくらめ 金沢 上野富貴子

異邦人に揉まるる市場夏めける

夏場所や郷土力士の勝ちに沸く

立葵てつぺんまで咲き誕生日

父の日や父の手跡のうすれたる

青青と若竹細く伸びてをり

退院や初鮎跳ぬるをんな川

トマト食ぶすつと消えたるだるさかな

聞きほるる鳥語のあとの河鹿かな

夏立つや青一刷けの白磁皿

奥能登の太鼓地を打つ夏祭

○あいの風富山平野を一撫でに

声の先蛇悠悠と草叢へ
薔薇園に揃ひの笠や鎌の音
小鮎煮る青き香りや雨もよひ

田上ナツ子

菅原雅子

新出祐子

北野陽子

○よき声の僧の読経や若葉風 金沢 廣田宏美

睡蓮の紅ふふむ今朝の池

若楓鎮座してゐる陶狸

運勢は上上とあり夏至の朝

夏来る地震押し上げし白き浜

夏燕視野に一線描きたり

○棹歌の山中節や涼み舟 宮崎 宮崎恵美

高台の玻璃戸輝く夏の朝

菖蒲田の手入れの男の子見え隠れ

燕来る芝の上低く飛び交し かほく 能任康子

夏服の母の腕のやはらかき

一言を掛け青蚊帳をくぐりたる

○師の一步の摺り足涼し能舞台 白山 朝倉みゆき

雲晴れて闇に際立つ梅雨の星

梅雨明の作物香るフライパン

垂れ下る葉の影となる葛の花

青鷺の瀬を飛び出すを眩めり 鶴尾 正江

参道の湿りがちなり苔の花

つばめつばめ地震に崩れし町の空 珠洲 井端久子

○白山の風に水の香花山葵

冷麦に酒豪うるほす湖北の酒

敦賀

川口和代

○繭踊るすばやく手繰る聴き指

菖蒲田に揺るる葉の音地藏坂

風五月ねこ伸びをして微笑んで

徳島

池田やすし

風薫るモカ珈琲の苦味かな

○算術の少女爪噛む五月晴

湯上りのワインの香り星涼し

林 早苗

葉隠れに鈍き鳴き声梅雨鴉

青葉山過ぎて湯の里水ぐるま

空梅雨の女ばかりの待合室

山本晴美

紋白蝶蜜を吸ふ時翅閉ちて

朝涼や鳩が寄り来る精米所

朝鴉紅き山桃くはへをり

山本瑤子

新樹光子は変声期迎へをり

枝豆の匂ひ香し大書院

○豆腐屋の捨て水に群れ梅雨の鯉

小松島

田上幸子

甲板の風に夏服翻る

花栗に噎せる山頂リフト着く

○ずつしりと金の重みの枇杷もらふ

松山

入河 大

どんよりと声を引き摺る梅雨鴉

麦秋や勝手口まで草伸ぶる

参道は新茶の香り京の旅

福岡

園田清子

病葉の雨に打たるるバス通り

みんなみの枕崎にて初鯉

さざ波の寄せては返す麦の秋

鶴田輝代

涼風や異国語多き宰府絵馬

紫陽花や人の群れたる手水鉢

水菓子匙のつめたく残りけり

宮田千恵子

畑のもの褒めていきたり梅雨の傘

墨たつぷり筆にふくませ梅雨ごもり

四葩咲く赤き仁王の法華経寺

太宰府

美山留唯

夏空や雷門の大提灯

雲の峰スカイツリーの天を衝く

紫陽花のひとときは青し裁判所

那珂川

高山ひさ子

菅貫へそろりと上ぐる左足

水無月の息たつぷりとハーモニカ

電線に朝のおしやべり燕五羽

門司

請関ゆかり

お隣の枇杷の実たわわ小振りかな

大漁旗迎ふる岬夏の鳶

縁側に二尺足らずの蛇の衣

国府前

山口孝治

まなかひにたなびく雲や梅雨の夕

教室の窓を打ちつぐ火取虫

六月の供花へわづかな風の筋 那覇 大城末治

夏霧へ平和の鐘の静れり

六月の光を放つ刻銘碑

万緑へ礎いもの波の影をなす

万緑の中少年の祈りの詩

雑用のひとつ残りて小暑かな

天窓に苔の茂りやモネの彩

炎昼の逆光新聞集金人

氷菓甘しテレビドラマの悲しくて

島守の塔の頂蟬の声

白百合の香を抱く少女黒リボン

岩陰の祠小さきへ大西日

米兵のタトゥーの証灼けりたり

夕餉どき父を語れる沖縄忌

大蜘蛛の灯下歩める目覚めかな

菓子箱と供花を小蔭に沖縄忌

韓国の円き塚より梅雨の蝶

ついでゆく猫の片蔭壺屋路地

脚本の脱稿未だ明易し

稽古果て白髪増えたる髪洗ふ

庭先の鈴なりトマトまだ青し

辺野喜宝来

稲嶺有晃

高嶺容道

玉城玉常

宜野 顕

ベルン 森尾 舞

万象基金のご報告

匿名 五口

西本才子様（横浜） 五〇口

（令和6年8月1日～9月4日）

「万象」の発展のため、大切に使用させて頂きます。

万象俳句会

〈新会員のご紹介〉

8月の新規加入者です。

小池宗彦様 東京都中野区（再入会です）

杉山巳代様 静岡市



万象作品の佳句

内海良太

夏安居や古き櫺戸閉づる音 東京 一由久美子

安居の句は雲水や僧が対象となることが多い。安居のはじまりはインドの二期の3ヵ月間、托鉢が出来ないため、外出を禁じ寺に籠もって修行に専念させたことに始まるという。この句は櫺の門扉が閉じられいよいよ夏安居が始まった日のことか。傍で見ているも身が引き締る思いがする。

あかつきの木木の騒めき桜桃忌 横浜 星野信子
6月13日、作家・太宰治（1909～1984）の忌日。

作家的な業績や昭和23年6月、東京都三鷹市の玉川上水で愛人とともに入水自殺したことは知られるとおり。「あかつきの木木の騒めき」が不穏な思いを掻き立てる。

山法師谷照したるひとと 静岡 松永博子
山法師は高さ5～10メートルになるおおきな木。5、6月ごろ枝の先に白い花をつけ美しい。句は渓谷での瞩目、緑深の中に一本の山法師、その周りが花の白さで一際明るくなっている。何年前か前、大勢で井川に吟行したことがある。山谷を縫って行った時の景色が思い浮かぶ。「照したる」と捉えたのいい。

川添ひの囀看板鮎解禁 敦賀 為永香月枝
関東では6月1日が鮎の解禁日。釣り師達は前日から近く

に宿を取って、仕掛けの仕度に余念がない。

句は敦賀の為永さんなので何処の川だろう。九頭竜川だろうか、それともこじんまりとした近くの川だろうか。川沿いの街道は「囀看板」の幟や看板が出て賑やかになる。

うすものを緩やかに着て崩れなし 東京 長谷川はるみ

暑い日に着物をきっちり着ているのは、見た目にも涼しげ。緩やかに着るのは実に即しこれもいい。類想の多いフレーズだが「崩れなし」といって長谷川さんの句になった。類想句を恐れず、自分の句を作って行けばいい。

入梅や谷田部句集を音読す 柏 村田由美子

「矢田部句集」は令和3年に亡くなられた谷田部栄さん（万象同人）の句集。「那須野」「鮎のころ」がある。句風は行き届いた写生で、余情のある句が多い。

私も俳句を始めた人に、参考になるので是非読むようにと薦めた句集である。村田さんはよく勉強している。

紫の風やひかりやラベンダー 札幌 谷 廣司

北海道にはラベンダー畑が多い。富良野の丘陵には紫のラベンダーが一面ひかりや香りを放っている。風がむらさき色に染まって吹いているのが面白い。

北海道という自らの地に根ざした確かな句境。

氷砂糖かたりと解くる梅酒瓶 横浜 坂本具子

梅酒を作られたのだろう。大きなガラス瓶に梅と氷砂糖と焼酎を入れる。口当たりがいいので人気がある。「かたり」は氷砂糖の溶ける音、水割りウイスキーの氷の溶ける音も「かたり」。これも自然の真理。

これより三句入選よりの佳句

夏座敷小津映画めく爺一人 札幌 島崎 洋

私達の年代は小津映画や黒澤映画を楽しませてもらった。

ことに小津映画の日常生活の中で人物の内面的な感情や微妙な人間関係の描写が何ともいえなかった。

夏座敷に一人いる爺を、島崎さんは低いところからの視線で追っている。小津映画のように……。

月の山夏霧阻む八合目 新庄 曾野部礼子

この句は山霧。月山の八合目まではバスが開通しているの
で、観光客が多い。つづら折りの道路の霧は危険、バスは霧
に阻まれて立ち往生しているのだろう。

これからも出羽三山の句を皆さんに紹介して下さい。

野ざらしの賽銭あまた蟻の列 新潟 齋藤 信

賽銭が散らばっているのは野仏の周りか。信仰心の篤い人
が、通る度に手を合わせて賽銭を置いて行く。蟻の列で地面
が見えてきた。散らばっている賽銭を「野晒し」と捉えたの
が面白い。

一日が静かに終る沙羅の花 佐倉 鈴木美根子

世は乱世、一日が当たり前に平穏無事に終わること、こ
んに有難いことはない。世界中の報復の連鎖は目を覆うば
かりだ。夕方庭の沙羅が花を落とした。沙羅の一日も静かに終
わったのだ。「一日」「沙羅の花」との取合せがいい。

描かれし三保の松原夏蒲団 松戸 石川 幸子

夏掛け蒲団の柄が三保の松原、いかにも涼しげでいい。

しかも柄は手描きで、プリント柄には無い味わいがある。

夏掛け蒲団の柄に焦点をあてた句は珍しい。

籐椅子に残る主の背の凹み 東京 松井宣夫

籐椅子は亡くなられたこの家の主人が使用していたもの。
節色になった籐椅子の凹みは主人のものにまちがいない。椅
子に残る凹みにさまざまなのが思い浮かぶ。

即物的な描写に情が乗り、余情も十分。

舞鶴の記憶に残る夏の海 東京 松本幸男

松本さんの舞鶴への記憶はどのようなものなのだろう。一
般的には、戦後の引揚船の帰港した港と知られる。

私も旅の途中で舞鶴に途中下車し、写真で見た港の景色を
確認したことがある。松本さんは実際にこの舞鶴港に引揚げ
て来たのだろう。海の色を今も鮮明に覚えている。

なめくぢり標高千の山暮し 静岡 飯田優子

この山暮しは飯田さんご本人か、それとも標高千の、こ
んな高いところに「なめくぢり」と驚いているのか、多分、後
者の方だろう。前者だと境涯性の強い句、そこまで深読みし
なくてもよさそうだ。飯田さんの感動の句と解釈した。

棹歌の山中節や涼み舟 金沢 宮崎惠美

涼み舟の船頭さんが涼しい声で山中節を歌ってくれたのだ
ろう。山中節は加賀温泉のお座敷歌として知られている。
棹歌は「船頭などのうたう歌」などと説明されている。山
中節のルーツは北前船の船頭歌に遡るといふ。

新中央句会報（7月例会）

令和6年7月28日（日）東京文化会館

（出席24名）

江見 悦子 主宰選

涼しさの土産を籠に道の駅 大久保 進

膝の灸最後かつかと朱夏の昼 三屋 英俊

遠雷や夕餉の匂ふ道急ぐ 小池 清晴

筑波嶺のゆらゆら揺るる炎暑かな 内海 保子

鰻屋の煙に釣られ列の端 小池 清晴

門燈の点らぬ家の凌霄花 沢辺 たけし

高く高く赤きカンナの花は火矢 砂地 宏子

エメラルド婚真近の夫と心太 神田 美穂子

新幹線下り東京の溽暑かな 神田 美穂子

向日葵の種整然と渦巻けり 奥 太雅

茶屋街の出格子奥は夏座敷 中村 千久

④ 本棚に一書はみ出す暑さかな 榎 本文代

⑤ 本棚に一書はみ出す暑さかな 榎 本文代

整然と書物が並んでいる本棚の中の一冊が、少しはみ出して
いた。作者は、いつも身辺身綺麗に暮らしている方なのだ

ろう。その乱れにふつと暑さを感じたのだ。細見綾子先生の句に「暑き故ものをきちんと並べをる」（『冬菫菫』所収）がある。作者も又、はみ出た一書をそつと並べ直し「これで良し」と心安んじたに違いない。

エメラルド婚真近の夫と心太 神田 美穂子
エメラルド婚が結婚55周年のお祝いであることを知った。

もうすぐ55回目の結婚記念日を迎える夫と心太を啜っている場面だ。「間近の夫と」の措辞が効いている。それぞれが独立した人格として長い年月を紡いできた夫婦なのだろう。今日はレストランではなく行きつけの甘味処の心太、安気な間柄が楽しく、俳諧味のある句となった。5年後はダイヤモンド婚ですね。是非また句をお作り下さい。

向日葵の種整然と渦巻けり 奥 太雅

向日葵の種の有り様に感動した、外光派の作者ならではの一句。ぎっしりと螺旋状に並んだ無数の種を「整然と渦巻けり」ときつぱりと写生した。まだ完全には枯れきっていない種なのだろう。夏を謳歌した花が枯れ、真っ黒になった種からは油が絞られ、食用ともされる。そんな向日葵の種に見入っている作者の発見と共感の句。

内海 良太 名譽主宰選

膝の灸最後かつかと朱夏の昼 三屋 英俊

三線を復習ふ庭先花芭蕉 奥 太雅
墨雲の流るる速さ我鬼忌かな 星野 信子

冷房や谷田部句集を音読す 村田由美子
手をつなぎ少女速足プールの日 松井宣夫

物憂しや大暑の厠磨けども 久留島規子

小麦色の美しき鎖骨やサンドレス 神田美穂子

晴三日星を数へて夜干梅 三木 豊子

河馬潜り渦巻く水に夏落葉 沢辺たけし

野良の婆汗の藍の背濃紺に 三屋 英 俊

茶屋街の出格子奥は夏座敷 中村 千久

外人墓地鉄扉に絡む藪がらし 三木 豊子

④ 外人墓地鉄扉に絡む藪がらし 三木 豊子

横浜の外人墓地には安政年間から今まで、この国で果てた
41万回、4200余人の霊が眠っている。

正面入り口に鎮魂の詩碑を刻んだ門柱と大きな鉄扉、重厚
で美しい。夏季は除草が間に合わず、雑草が伸び放題。鉄扉
に絡む藪がらしが夏の墓地を物語っている。

膝の灸最後かつかと朱夏の昼 三屋 英 俊

以前、お寺の本堂で住職の指導で大勢の人達がお灸をして
いたのを見たが、今は鍼灸院とかで行われているのだろうか。
膝の灸といへば三里のツボ。奥の細道に出発する芭蕉が

「三里に灸すゆるより……」と言っている。句は艾もぐさの最後に
赤く燃え尽きそうな場面が印象的。全体的に夏の灸は熱そう。
朱夏の朱は五行説に定めた夏の色という。

茶屋街の出格子奥は夏座敷 中村 千久

夏座敷は「風」歳時記によると「襖や障子をとりはずし、涼
しげな調度にかえた座敷」とある。一般家庭でも夏は模様替え
をすることがあるが、この句は茶屋街。出格子の隙間から偶
見えた座敷が遊興の間らしい。夏向きの設えがしてあった。
夏座敷の句は芭蕉にも一茶にもある。昔は今よりも身近な
題材だったようだ。

中村 千久 選

紫陽花の花叢縮みゆく真昼 砂地 宏子

三線を復習ふ庭先花芭蕉 奥 太雅

金網の好きな昼顔今日は雨 島野 ひさ

門燈の点らぬ家の凌霄花 沢辺たけし

大夕立去りて夜空に月白し 久留島規子

小麦色の美しき鎖骨やサンドレス 神田美穂子

ぎやまんの薄茶透けるる夏茶碗 久留島規子

明けきらぬ森ざわざわと蟬しぐれ 久留島規子

滝の上洗ひざらしの空真青 神田美穂子

河馬潜り渦巻く水に夏落葉 沢辺たけし

朝顔の鉢植を並ぶ投票所 小池清晴

④ 加賀干菓子 of せて越前和紙涼し 三屋英俊

⑤ 加賀干菓子 of せて越前和紙涼し 三屋英俊

お茶席に和紙に載せた干菓子が供されたというような句はいくとも見かける。作者はそこに「涼し」という季語を添えた、ここが一句の読みどころ、味わいどころということになる。「加賀」「越前」という旧国名もゆかしさを伝えている。

紫陽花の花叢縮みゆく真昼 砂地宏子

〈紫陽花に秋冷いたる信濃かな 久女〉とあるとおりの花期が長い紫陽花だが、今年には異常気象のせいなのか、8月にはすでに枯れ始めていた。作者はそんな花叢を一句に仕立てた。「縮みゆく真昼」とはよく言ったものだ。この暑さ、確かに尋常のものではない。だから破調にしたくなるのだ。

河馬潜り渦巻く水に夏落葉 沢辺たけし

動物園の河馬の池である。猛暑に堪えかねた河馬がその大きな体を、ざんぶと水の中に沈めたのだ。池には大きな渦が巻いたが、作者はその渦に吸い込まれてゆく「夏落葉」に目を留めた。この季語の斡旋で、辺りの景色が見えてきた。

榎本 文代 選

軒端より涼しき音の来りけり 沢辺たけし

たてがみの切り揃へあり祭馬 内海良太

加賀干菓子のせて越前和紙涼し 三屋英俊

墨雲の流るる速さ我鬼忌かな 星野信子

箱庭の空や如雨露の降水帯 内海良太

高く高く赤きカンナの花は火矢 砂地宏子

きゆうと鳴き割かれ煮込まれ泥鰌鍋 松井宣夫

竹煮草払ひ遠嶺の青青と 江見悦子

行水の赤子うとうと握るゆび 下嶽孝一

砂糖壺のべたつき拭ふ小暑かな 田中道江

夏富士へ新しき窓押し開く 江見悦子

⑥ 日盛をひたすら少年は走る 星野信子

⑦ 日盛をひたすら少年は走る 星野信子

⑧ 日盛をひたすら少年は走る 星野信子
サッカーや野球の練習でグラウンドを走っている少年たちなのだろうか。「日盛」に一人の少年を思った。照りつける夏の日差しの中、ひたむきに走り続けている少年。どこか屈折したような内面も感じられる。

軒端より涼しき音の来りけり 沢辺たけし

風鈴の音色が詠まれている。しかし木木を渡る風の音、水の音、夕暮れのギターをつま弾く音でもいい。涼しさは伝わってくる。

箱庭の空や如雨露の降水帯 内海良太
「箱庭」は箱に土を盛って庭を作り、小流れや橋など自然の景も入れたもの、夏の遊びである。如雨露で雨を降らせたら箱庭に空が生まれた。そして「降水帯」と荒荒しくなった自然も盛り込まれた。

神田 美穂子 選

| | |
|------------------------------|-------|
| 膝の灸最後かつかと朱夏の昼 | 三屋英俊 |
| 店たたむ男の手練大夕立 | 長谷川信也 |
| たてがみの切り揃へあり祭馬 | 内海良太 |
| 鉄落す音のくぐもり梅雨湿り | 田中道江 |
| 白桃の重み諸手に在りにけり | 吉中愛子 |
| 蟻忙し豎穴住居の柱穴 | 江見悦子 |
| 百合の香のいとましき夜なりけり | 中村千久 |
| 銀色の雨に翹立て川蜻蛉 | 沢辺たけし |
| 煉瓦道叩き上げたる驟雨かな | 村田由美子 |
| 本降りの前のひと粒孟蘭盆会 | 下嶽孝一 |
| 指さして金魚と心かよはする | 内海保子 |
| ④物憂しや大暑の厠磨けども | 久留島規子 |
| ⑤物憂しや大暑の厠磨けども | 久留島規子 |
| ⑥日常の一齣だが、「大暑」という季語によって詩となった。 | 久留島規子 |

「大暑」はいよいよ暑さ本番の時節。年年温暖化の進む今、もうすでに暑さ本番。暑さを払拭しようとトイレ掃除をしてみたものの、心は晴れなかった。

白桃の重み諸手に在りにけり 吉中愛子
一読、景の見える句。作者の両手には瑞瑞しい大振りの白桃が乗っている。ずっしりとした重みを両手に受け止めている感動が伝わってくる。

指さして金魚と心かよはする 内海保子
何一つ難しいことは言っていないが、じつと金魚と向き合っている作者が見えてくる。水槽の金魚を指さしていると、金魚と心の対話が出来たように思えたのでしょうか。そんな童のような心を大切にしたい。

今後の新中央句会の予定

▽10月例会は、全国俳句大会の前日の為、休会とします。
▽11月24日(日) 東京文化会館 小会議室 13時より

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界 2024年 10月号

特集

はじめの一句〜俳句への道

○俳句を始める、前段階の悩みにこたえる

Q1「言葉」が浮かばない 佐藤郁良/Q

2 詠みたいことが多く、短くできない

加藤かな文/Q3 自分の句が普通で、オ

リジナルなのかわからない 高田正子/Q

4 名句で勉強しようにも、名句が難し

い 岸本尚毅/Q5 句会を勧められる

が、人付き合いが苦手 塩見恵介

○俳句を作ってみよう！と刺激を受けた句

鳥居真里子 小林貴子 野中亮介

トラビシ 俳句界NOW 鈴木正子

特集「笑い」の力

○笑いの効能

井上宏(日本笑い学会初代会長)

○思わず笑ってしまう俳句セレクション

○滑稽俳句協会の取組み 八木健

【注目の句集】

山咲一星『どっこい生きてる』

北澤星子『砂の伽藍』

本セレクション結社「山繭」福山良子

松尾清隆「松の花」

「俳句界」投稿欄

一流選者11名！
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社文学の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

俳句

10月号 予告

9月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)®

巻頭作品50句 宮坂静生
特別作品30句 中村和弘
作品21句 山尾玉藻 ほか新作多数！

大解剖！

魔法の一音

▽総論 一音の重要性
▽論考 季語・名詞・動詞・助詞・助動詞
▽鑑賞 スゴイ一音の句

対談 隠岐の楸邨

石寒太×小澤實

評載 好連
俳句の水脈・血脈／蛇笏賞の歴史
小林秀雄の眼と俳句 ほか

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

ルビーの小函 (10月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったものの中から、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- | | | | |
|----|-----------------------|----|--------------|
| 8 | 海鞘 (ほや) | 27 | 叢菜 (とくだみ) |
| | 蕁麻疹 (じんましん) | | 未草 (ひつじぐさ) |
| | 天蚕 (てんさん) | 28 | 四阿 (あづまや) |
| | 未刻 (ひつじどき) | | 一ツ灸 (ひとつやいと) |
| 9 | 鶺鴒 (かささぎ) | | 幽き (くらき) |
| 13 | 針槐 (はりえんじゅ) | | 木乃伊仏 (みいらぶつ) |
| 14 | 紙垂 (しで) | 39 | 座繰機 (ざくりき) |
| | 嘎れ (しゃがれ) | | 芒 (のぎ) |
| 15 | 鞠 (ふいご) | | 競る (せる) |
| | 刳れて (えぐれて) | | 鬘斗 (のし) |
| | 糺の森 (ただすのもり) *京都・下鴨神社 | 40 | 火山灰 (よな) |
| 16 | 野萱草 (のかんぞう) | | 稗搗節 (ひえつきぶし) |
| | 裾廻 (すそみ) | 41 | 霽れ (はれ) |
| | 鶴 (こう) | 43 | 石蓴汁 (あおさじる) |
| 17 | 山桜桃の実 (ゆすらのみ) | | 峙て (そばだて) |
| 18 | 家苞 (いえづと) | 66 | 西表島 (いりおもて) |
| | 仕舞屋 (しもうたや) | 68 | 潦 (にわたずみ) |
| | 勢ひ (きおい) | 69 | 誘はれ (いざなわれ) |
| | 隣家 (となりや) | | 濁声 (だみごえ) |
| 19 | 忍冬 (すいかづら) | 70 | 現 (うつつ) |
| | 八ヶ岳 (やつ) | 71 | 下野草 (しもつけそう) |
| 20 | 柵の花 (ずみのはな) | 72 | 翠巒 (すいらん) |
| 24 | 戦ぐ (そよぐ) | | 夏蚕 (なつご) |
| | 襦袢 (むつき) | | 山棟蛇 (やまかがし) |
| | 仙人掌の花 (さぼてんのはな) | | 峙 (とぐろ) |
| 25 | 杙 (えぶり) | | 産土 (うぶすな) |
| | 宗長 (そうちょう) *室町後期の連歌師 | 74 | 病葉 (わくらば) |
| 26 | 溶岩 (ラバ) | | 菅貫 (すがぬき) |
| | 和毛 (にこげ) | | |

北 南 西 東

消息等

内海良太名誉主宰、江見悦子主宰の句

「くちら」 8月号に

田水引く薫屑どつと押流し 良太

葉桜の下葉桜の風湧けり 悦子

「初蝶」「たかな」 8月号に

花ゆすら受かりましたと又一人 悦子

「対岸」 7月号「結社誌を訪ねて」に中村千久編集長の句を中原修子氏が鑑賞

ザリザリと短波のノイズ響くもり

「万象」 5月号

春先にはモンゴルや中国北部から大量の砂塵が偏西風に乗って日本にも飛来します。今年も日本を脅かすこの黄砂の量は凄く、窓から眺める風景は黄ばみ、口中がじやりじやりし花粉症と相まって不快に感じられた方も多いと思います。掲句には短波ラジオの雑音が出てきます。現在はインターネットや衛星通信の発達により短波放送を行う放送局も非常に少なくなりましたが、以前は短波放送でヨーロッパの放送を聞いておられた方も多いと思います。「ザリザリ」と「ノイズ」という濁音交じり片仮名表記により、ラジオからの雑音の度合いが増し、部屋全体に響きわたっています。「霾」の雰囲気と短波通信の音の乱れが非常に響

きあって巧みな一句です。

静岡新聞「四季の森」に内藤恵子氏の句(6月30日付)

ゆるやかに巻かれて匂ふ大茅の輪

(第七回島守忌俳句大会に辺野喜宝来氏が荒井退造賞を受賞(NPO法人「菜の花街道」(宇都宮市)主催 沖繩忌の6月23日開催)

オオゴマダラぐらりと塔へ島守忌

島守忌俳句大会は、平成29年のブレ大会+第5回まで那覇市で行われていましたが、昨年からは荒井退造出身の栃木で引きつがれました。

(神戸出身の島田淑知事と県警察部長の荒井退造慰霊に「島守忌」と名づけ季語としました。)(前田貴美子さんのお手紙より)

第18回角川全国俳句大賞 選者特選に荻野加壽子氏

片山由美子・西村和子選 秀逸

大根より大根の葉をほめらるる

「俳句界」7月号特集「師へ送る手紙」より

「壮大なる精神風土」と題する、田島和生(「雉」主宰・農)から沢木欣一へ送る手紙

先生、黄泉の世界でも俳句を楽しんでおられますか。亡くなられたのは、二〇〇一年十一月五日、享年八十二ですね。

ご逝去後も先生の俳句にかける御遺志は脈々と続いております。最近「風」の僚誌

「伊吹嶺」が創刊二十五周年記念「沢木欣一評論集」を出しました。帯に「社会性俳句とは何か。即物具象とは何か。俳句表現を極限まで追求した沢木欣一の主要俳論を収める評論集」とあり、先生が情熱をかけた貴重な俳句論考集です。(中略)

「風」35周年記念大会のご挨拶で「人間が立派でなければ俳句は立派にならない。人間的な誠を大切に下さい」と話されたことは今でも忘れられません。(後略)

「中山純子忌十周年記念句会」に主宰参加

8月1日、中山純子先生を追悼する10回目の記念句会が、金沢の西光寺・中條睦子宅で、開催された。今月号56〜60ページ。

作品募集

「第32回西東三鬼賞」俳句募集

・ 雑詠 5句1組につき二千円

・ 投句締切 10月31日

・ 詳しくは岡山県津山市のHP参照

(報・編集部)

9 3 9 0 3 6 4

射水市南太閤山13
|
24

万象作品投句係行

10月1日より
110円切手を
貼ってください

| 氏名 | 住所 |
|----|----|
| | |

〈通信欄〉

編集後記

▽9月号本誌について二つのお知らせを致します。

昨年10月号から一年にわたって続いた、中本清さん（沖繩）による「同人句鑑賞」が最終回となりました。首里城再建の中心人物による文章は、木組みの精神そのままの安定感、そして抒情性に富むものでした。感謝！

執筆者のご事情で休載していた「風音散歩」が復活しました。小林愛子名誉顧問によるこのページから再び学べることはなんとありがたいこと。

（千久）

▽万象俳句賞の事務局を担当して、今年で5年目になります。応募作品を最初に見ることが出来、どの作品が受賞するのか予想してみるのも楽しいものです。今回も予想通り、伊藤美音子さんの受賞が決まり、選句が間違っていないなかったと、自己満足しています。28日の全国大会で、皆様にお会いできるのが楽しみです。

（規子）

▽「万象」8月号の編集後記に編集

長の書かれていた黛まどかさんの「新しみと新しがりは違う」に、私も思わず頷いてしまった。必要以上にカタカナ言葉や流行の言葉を使った句に常常疑問を感じていた。

（美穂子）

▽陰暦10月の異称は「神無月」。初冬の季語。が、気象庁の長期予報によれば平年より高温が続くとか。8月の台風5号は日本近海で発生。もはや日本は亜熱帯気候の中にあるようだ。それでも、空の青さや風のそよぎの変化に敏感に俳句を作りたい。歌は「鬼神をもあはれ」と思わせるのだから。

（宏子）

▽妻が今年突然糠床を作った。私は妻の気まぐれに巻き込まれないようにと思ったが、家事を分担している以上、避けて通ることは出来なかった。野菜によって漬けておく時間と塩加減が変わる。これが厄介で、漬け過ぎたり、塩辛かったり、未だ勉強中である。そこで一句。

ぬか床に探し当てたるめうがの子
糠床の恩恵というべきか。

（清晴）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10
塗木翠雲

万象 十月号

第二十三卷 第七号

通巻 第二七一号

令和六年十月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-00072

東京都杉並区高井戸東一-31-6 603

万象発行所

☎03-3633-2457 03-3633-2457

令和6年度「万象」全国俳句大会・「万象」同人会総会 案内

開催日 令和6年10月28日(月) 午前10時30分より受付を開始します

午前11時～同人会総会

午前12時～全国俳句大会(午後4時終了予定)

会場 ホテルグランドヒル市ヶ谷(東京都新宿区市谷本村町4-1) ☎03-3268-0117

【交通】JR中央線・総武線、都営地下鉄新宿線、東京メトロ有楽町線「市ヶ谷駅」より徒歩3分

※参加を申し込まれた方で、やむを得ず欠席される場合は、必ずご連絡ください。

(連絡先) 大久保 進 ☎044-333-1054

※大会終了後、午後4時半より、ホテル内別会場にて二次会を行います。(希望者のみ)

※新中央句会10月例会は、全国俳句大会の前日になるため、休会とします。

※当日・前日の当ホテルでの宿泊の斡旋はいたしませんので、各自ご手配ください。

全国の皆様にお目にかかれるのを楽しみにお待ちしております。

令和6年度「万象」全国俳句大会実行委員会

大会委員長 江見悦子
実行委員長 中村千久